
ボク等のユメ物語

小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボク等のユメ物語

【Nコード】

N0994J

【作者名】

小豆

【あらすじ】

雫と麟が見た不思議な夢？の物語。

そこはほんとに夢なのか？どうやって目覚めるのか？

根本的なことは全て無視しながら着々と物語りは進んでいきます！

！

ぶろろおぐ

【はじめに】（前書き）

だいぶ読みづらいです。注意。

根本的なことは無視します。注意。

ちなみに「ぶろろおぐ」はただの注意書きです。ちゅっい！！

ぶろろおぐ

【はじめに】

この物語はごく平凡の、ごくごく平凡の女の子

許斐崎 雫 このみさき しずく 現在十五歳

一人称、ボク 通称、しい
が

黒峰 麟 くろみね りん 現在十六歳

一人称、俺 通称、麟 雫とは幼馴染の腐れ縁。
と 関西弁

変な夢？を見る。という簡単な物語です。たぶん。

麟のせいでギャグになっておりますがそれはけっしてボクのせいではございません。

基本的にはボク（雫）視点となっておりますが、それも確かではございません。麟のせいです。

さらには時々変な表現が入っていたり、納得のいかない事がだいぶあると思いますが

それはすべて夢だから、ボクだから、麟だから、という事で片付けられますので

どうぞご利用ください。

でわでわ、読みにくいと思いますが

楽しんで書くので頑張って読んでくださいね♪

。め風に

↑の

許斐崎 雫。

ぶろろおぐ

【はじめに】（後書き）

次から物語が始まります。

自分でも納得のいかない一話です ↑じゃあ投稿するなよ!!

でも頑張ります!これから。

でも読んであげて下さい!!じゃ無いと泣きます。。。

E p i s o d e ?

「夢を見ます」

(前書き)

サブタイトルは気にしないでください。
こだわりはございません。

Episode ?

「夢を見ます」

天才とバカ、という組み合わせがある。

物語の中の話だ。

女と男、でかいのと小さいの。クールなヤツと騒がしいの。

普段なら反発しあって絶対といっていいほど相容れない2つが仲良くなってしまう時、物語は始まる。

仲良くって言うかなんだかんだで繋がってしまった時。まー腐れ縁みたいな。

普段は相容れない2つが一緒にいたらそりゃーもう否が応でも物語は始まってしまうだろう。

ま、すべてボクの考えの上で。だが。

ボクの名前は許斐崎^{このみさき} 雫^{しずく}。現在15歳。一人称はボク。もちろん女

！！

今更！？と思うけど自己紹介。誰に対してかは不明。もちろん不明！・・・だからね？？

まーいいやつ！そこんトコは流して！！うん！！

それよりも今、ボクはすッごい危機に面していた。

どんなんかと言われると、そりゃあもうすッごいのだ。

「なにボあツとしとんの？？」

なんか聞こえた呑気な声は無視してボクは考えにふけた。

何を考えているかというと、まずは現状把握だ。

何がどうしてるんだろうか・・・考えても夢落ちしか浮かんでこないボクは

たしかバカだ。勉強は出来るんだけどな。なあんでこんなバカな
んだろ??

「ねー何考えとんのお!!」

あゝんもうツ！！うつさいなあゝ！！耳元でそんなに叫ばれたら殴りたくなるんだけど！！

それでもスルーするボクを見てもアイツはまだ諦めない。ウザッ！！

「なあ！！何考えとんのって聞いてるやろがあッ！！」

「うっさいんだよボケがぁー！！！」

さすがにブチ切れたボクは叫んだその勢いですぐ隣にいたコイツに
回し蹴りを食らわせたやった。

「ぐはあッッ！！！！！！」

大げさな声を出しながら地面に倒れるコイツ。オーバーアクションだ。

こいつの名前は黒峰くろみね麟りん。現在16歳、男。一人称は俺。

ボクの幼馴染。というか俗に言う腐れ縁だな、コレ。ボクの事は、
 しい、って呼んでる。

昔、大阪に住んでた麟は十年も経つた今でも関西弁を喋ってる。な
んでやねん。

まあいいや、いまだに地面に突っ伏してる麟を無視してボクは周りを見渡す。

見渡す限りの草原だ。なんてこった。なにもないじゃん。

もちろんボクが住んでた所はこんなじゃない。普通の住宅街だ。何でこんなトコにいるのだろう・・・さっきからボクはそれを考えていたのだ。

たしか・・・

その日は別に特別な日ではなかった。

いつものように麟と学校に行つて、帰つてきて少しゲームをやつていたんだ。

そしたら麟がやつてきて、一緒に遊んで・・・

そしたらなんか喉が渴いてきたんだっけ。で、

「あーのど渴いたっ」

なんて大声を出してみた。

「なんや、飲めばええやん。自分ちなんやし。」

なんて当たり前な返事を返したのはゲームでボクにボロ負けした麟だ。

「麟が持つてきてよおー」

負けたんだから言う事聞きなよねえ？という目で麟を見る。

なんでやねん。という顔でこっちを睨む麟。

だけど結局持つてきてくれる、というのが麟だ。なんだかんだ言つて優しいからさ。

そうして麟がボクんちの冷蔵庫を開けた、

そしてその瞬間ボク達は光に包まれ・・・

気がついたら此処に、何にも無い草原にいた。うん。確かそうだ。

・・・ナンデスカソレ。

「・・・しい??」

ほんの少し、思考停止したボクは心配そうにボクの顔を

覗き込んできた麟によつて現実に取り戻された。復活早いなーコイツ。

「いや・・・」

そんなを麟に適当に返事をしてボクはまた思考回路をフル活動させ

る。

っていうかコレ現実か??ホント夢以外ありえないじゃん。

あー夢だコレ。絶対夢だコレ。

「しっかし・・・どこなんかなあ??」

きつと夢だよ。夢以外ありえないって。

「・・・アレ??」

「・・・どしたの、麟?」

麟がボクのほうを睨んでくる。こんな時だけ返事すんなよってコト
だろーなー

「・・・いや、アレさ・・・」

少し不満そうにしながらもどこかを指差す麟。

その指の先を見てみると・・・

「アレ、人なんかな??」

そこには人みたいなのがいた。遠すぎて見えないから断言は出来ない
んだけど

たぶんアレは人だ。うん。

「人、だよな??アレ。」

「んゝ。たぶん・・・」

人だといんだけどなあー麟と話していると不安になってくる。

「よし!!じゃーいくかつ!!」

「・・・・・・ハ??」

「こんなとこでジッとしてるのもなんやし!あの人のとう、いつ
てみよ!!」

・ ・ ・ ・ ・ イヤイヤイヤイヤイヤ

いくら夢でもソレはナイだろッ！！まずは様子を見てからあつつ

とかいうボクの心の叫びも虚しく麟はすでに走りだしていたのだつ
た ・ ・ ・

E p i s o d e ？

「夢を見ます」

(後書き)

もし読んだ人は感想を書いて行ってやって下さい。
凄く喜びます。そろそろ凄く。

アト、更新遅くても見捨てないでくださいね??

がんばってはいるんですがね・・・遅くなっちゃうんです・・・

Episode ? 「人に会います」

遠くから見えたアレは確かに人だった。変な格好はしてるけど。

マントみたいな（ローブっていうのかな？）ものを着ていて、ソレについてるフードを

目深にかぶってる。顔は良く見えないけど、美人なのは確かだ。

たぶんボク達よりちよつとしたで13〜15歳くらいかな？？

こちらを警戒してるらしく腰に挿してある短剣らしきものに手をかけてる。危なッ！！

「そなたら・・・なにものじゃ？」

外見に似合わない喋り方だ。ほんとに年寄り？？

「え・・・と、怪しいもんやないんやけど・・・」

麟がおどししながら質問に答える。だいぶ怪しいな・・・

「俺ら、気がついたら此处にいて・・・なんか分かんないかなあ？と・・・」

いきなりそんなこと言われても分かるわけがないじゃん！！
と、心の中でつつ込みながらも相手の反応を待つ。

「気づいたらいた、じゃと？？そんなわけないじゃろって・・・嘘
つくでないぞ！！」

そう言っただけ？は短剣を抜き、麟にむける。

「ひッ！！」

男のクセに情けない声を出すなよ麟（麟）

・・・しかたない、ここはボクがヒトハダ脱いでやるかな？

少し、深呼吸をして麟の前に出る。

そして口を開き・・・

「スミマセン。ボク達西の方から来た旅の者なんですけど

なにぶん田舎者で、道に迷ってしましまして・・・ココから一番近い村とか無いですかね？？」

めっちゃ嘘をついた。

しかも満面の笑みというオプション付き あ、なんか麟がこっちみてる（麟）

しかたないじゃん？？こうしないとヤバかったんだからサ。

「・・・そ、そうか。え、あ、だがこっちの男は――

「コイツは旅のあいだに変な物を食べて頭が狂ったんです。気にしないでください。」

少しの間、沈黙が続いた。

と、思ったんだけど麟がこっちをじいっと見つめてた。

「俺、ウソをこんなに堂々と言う人、はじめて見たわ・・・」
って目が言ってる気がするけどスル！。

「あゝ・・・んと・・・」

ずっとだまっていた美人さん（あだ名。今ボクが付けた）が、口を開いた。

「なんか・・・すまんの。色々と」

アレレ??

なんか謝られちゃったよ？色々ってなんだろう？あ、でも1つだけ分かってることはあるね。

麟、絶対同情されてるね！アハハ！ボクのせいじゃないよ??うん。

そんなこんなで美人さんには殺されずにすんだボクと麟。

しかも謝罪のためとか何とかで近くの町まで案内してくれるらしいからラッキ

「ああ、そうじゃった！」

ボク達の数メートル先を歩いていた美人さんが何かをひらめいた様に突然振り向いた。

「自己紹介がまだだったのぉ！！すまぬ、気が利かんかった。」

そうですね。いくら夢でもいきなり出会ってお互いの事まったく知らないで

一緒に旅するのはマズイですよ。

出来ればずっと被ってるそのフードも脱いでくれると嬉しいんですけどね。

ボクの頭の中で考えてる事が分かったのか彼女はニッコリと笑ってフードを取った。

その髪はうすい青色だった。スカイブルーっていうのかな??
そしてその髪は腰まであつてフードの中からするりと流れ落ちた。
目は透き通ったクリーム色であんまりにもキレイな色をしていたか
らボクは息を呑んだ。

「我はヴィラ・クレイナという。アルフエイムという国に住んで
おる。

んと・ヴィラとでも呼んでくれると嬉しいの。」

そういつてヴィラはまた笑った。
ちきしょう、かわいいじゃないのさ。

「えつと俺は黒みツグフー!!!!」

「ボクはシイと申します。で、こつちがリンです。ヨロシク!!」
そういつてボクは自分のできる一番の笑みを返した。

これはいつか男を落とすために取っておいた最終兵器だ。

ちなみに麟は地面に突っ伏してる。ま、ボクが麟のわき腹を力いっ
ぱい殴ったんだけどね」

「・・・おまつ・・・なんで・・・え」

麟がこつちを睨んでる。でもちゃんと小声だ。分かってんじゃん。
そりゃいくら夢でも知り合ったばかりで変な名前してる人なんか
に本名教えたりなんかしたらアブナイもんね。保険ダヨ保険」

「シイとリンだな。よい名前じゃの!少しの間だがよろしくのう!
」

と、いつて手を差し出しながらまた、ニツコリと笑うヴィラ。
笑いすぎだよヴィラ、そんなに笑ってたら悪い虫が寄っていてし
ょうがないよ??

と、思いながらボクも手を出してヴィラの小さな手を握って握手す

る。

「うん。よろしくね。」

こんどは心から、下心ナシで、笑い返した。

でもこの時、ボクはすっかり忘れてた。
忘れてはいけない、いろんなことを。

E p i s o d e ?

「人に会います」(後書き)

雫と麟はなんかスゴイです。変なステータスを持っています。
でも簡単に言つと変人ってことです。変な人。

Episode ? 「おじつてくれます」(前書き)

ちよつと遅くなっちゃいました。
でも気にしません。 ↑ オイ
皆さんも気にしないでください。

Episode ? 「おっつけてくれます」

道中何の問題もなく、夢のクセして歩いたらちゃんと疲れるっていう
みよーに律儀な、かつ迷惑な問題点以外は全てが順調だった。

ヴィラともいっぱい話をしてだいぶ楽しい旅になった。

旅ってほど時間かかってないけどね。一日たってないし。

そしてボク等は目的の町に着いた。

「ここは中間の町、ピーコックじゃ。ここからはちゃんとした道が
2本出ていて

危険なトコも通らんぞ。北にいくとビリジアン、南はセルリアン
国へとつながっておる。」

「へー」

「なんか変な名前やんなあ・・・」

「・・・」

・・・だめだ。なんか寂しくなってきた。

ヴィラと仲良くなりすぎたよ。ココでお別れなのにスツごくイヤだ。
あーっもう！！誰か喋ってよ！！沈黙しないで！！泣きたくなる
から！！

「えと・・・我も今日はこの町で泊まっていこうかのお??」

「そ・・・そやで！！もう暗くなってくるだろうし一人で町ん外ある
くんはあぶないやろから。」

「そうじゃの！！金もあるし、急いでおるってわけでもないしの！
！」

そう、ヴィラが言ったとこで重大な事にボクは気がついた。

麟も気づいたらしい、どうないしょ??、みたいな顔でこつちを見る。見るな。

「ね・・・ヴィラさ・・・」

「ん?なんじゃ??」

「お金つて・・・」

そう、お金。

この夢はみょーにリアルな所があるからきつとお金も何とかしなければならぬのだらう。

この世界独自のお金とかあったりしたりするのだらう。どうしよう、そうなるとボク達とはーぜん所持金ゼロ。

今夜食べるものもなければ泊まる金もないね。アハ

「金か?んゝピーコックなら一人12エルヴェン(Le)らへんじやろうな」

エルヴェンってなにー!!!!????どこの国の単位だよお!?

「旅人のために低価格にしてあるからそなたらも安心じゃろ??」

安心ね・・・ゴメン、安心どころか野宿しなきゃいけないよボク達・・・

「ん?どうしたのじゃ2人とも。」

「あ・・・のさ??俺ら・・・さ」

麟がオドオドしながら話す。でもボクはそれが気に食わないので腹を蹴ってやる。シャキツとして事だよ??ム力ついたからとかじゃなくてサ。

「う・・・テメ・・・!!」

麟が痛みに耐えながらボクを睨んでくる。

でも怖くないよ??だからさっさと見えよ。

「・・・ヴィラ俺らさ、実は全く無いねん、お金・・・」

やつと言ったな。でもちよつと考えてみれば大した事じゃないじやん。

麟が野宿しなきゃいけないってだけでしょ??え、ボク?ボクは野宿なんかしないよ。

頑張れば倉庫ぐらい貸してくれんじゃない??女の子だし、みたいなカンジでさッ!!

「お・・・お金が・・・??」

ヴィラがキョトンとしながらこつちを見てる。正確には麟を、ただどね♪

「お金が・・・ない・・・と??」

「うん。そーなんだよね、悲しい事に。ボク等ビンボーだからさあ」

「しい、なんか全然悲しそうに聞こえないんやけど、なんでやる?なあ、なんでやる??」

うるさいな、麟は。こういう時だけなんか鋭いんだからさあ。

別に大した事じゃないよ。ボクは野宿しなくてもいい様になったっただけ。

野宿すんのは麟だけになった、っただけだよ??

「のう・・・お金が無い、というのは・・・ぜろ、」ということなのか・・・?か・・・?

それとも、・・・あまり無い、という事なのかのお・・・??」

ヴィラがオドオドしながら言う。うん、そうだよ。・・・ぜろ、な

んだよ。

ってか何でオドオドしてんの??なんか変なことでもあった??

「あのね、ボク等ね、ワケあつて家を飛び出してきたんだよね。

そんな時お金持ってくんの忘れてサ。だからお金無いの。まったくね。」

「ま、まったく無いのか!?な、なぜお家を飛び出してなどきたのじゃ!??」

「なぜって・・・アレじゃない??家が貧乏だったとか。」

「とかつてなんやねん!余計な事言つなや!!」

うるさいなあ。そういうお前だつておっきな声出してんのいいのかよ??

アレ??ってか、なんでヴィラはポカンとしてんの?

「そうか・・・そんなことが有るものなのか・・・お家を出るなど初めて聞いたのだが」

なんかボソツと言ってるのが聞こえたけど

もしかしてヴィラって良いトコの出身なのかな・・・??

「そうか・・・!!よし分かった。それなら今日は我が金を出そう。それで大丈夫じゃろ?」

え、ウソ。まちで??

もしかしたらおごつてくれるかな、とは思ってたけどホントに奢ってくれるの??

うわっ、案外太っ腹じゃん!!

「そんな!!悪いわ!!そんなことしいひんでもっグハア!!!!」

「ほんとおーに！？ありがとうヴィラ、ボク嬉しい！！」
そう言つてボクはヴィラに抱きついた。女の子同士だしべつにいいよね」

あ、ちなみにボクの足元には麟が寝てます。

倒れてるんじゃないかって寝てるんだよ？そこ気をつけて。テストに出るから。

「うおう！？シ、シイ？？な・・ナニをするのじゃア！？」

「アハ」顔真つ赤だよ、ヴィーラ」

「い・・いやっしかしシイ、こ・・こんなことは」

「アハハッヴィラ可愛い〜！！だあい好き〜！！」

「だッ！？す、好きッ！？」

うん！大好きだよ」金銭的な部分も含めてネ。

「そおだよ？？ボク、ヴィラの事好き！何で恥ずかしがつてんの？」

女同士なんだから恥ずかしがること無いじゃん。

それにたいしたことはしてないヨ？？もちろん。子供に変なことするほどボクは落ちぢやないよ？？

「い・・いや、おなごにそのようなこと言われたの初めてだから・・ッ」

「・・・・へ？？」

い、今なんて言つた？？なんか変なこと聞いた気がしたんだけど・・そつとヴィラから離れる。

「ど、いうこと？？」

「え・・いや、おなごにそのような事を言われたのは初めてだと・・」

「おなごつて・・・ヴィラは・・・？」

「我？我は男だぞ？？」

E p i s o d e 「おじつてくれます」(後書き)

基本、雫はヒドイ事ばかり考えています。
そして麟は可哀想なヤツです。

E p i s o d e ?

「不思議な気分です」(前書き)

今回は少し短めです。

でもそれはちゃんとした考えの上で、です。 たぶん。

E p i s o d e ？

「不思議な気分です」

彼、つまりヴィラは男だった。こんなに可愛いのに。

「・・・え???ヴィラ、男???」

「もちろんじゃよ???我がおなごに見えるかの???」

・・・見えますとも。バツチリと。

ちなみにボクがあっさりヴィラの言うことを信じたのは
ヴィラがウソをつくような子じゃない、と知っていたからだ。麟が
言ったのはワケが違う。

それに確かにヴィラは自分が女だなんて一言も言っていない。
ボクが勝手に女だと思い込んでただけだから。

「・・・そっか・・・男なんだ・・・」

ちょっと声に出してみる。すると思ったよりも自分がつかりして
ないことに気づいた。

それはヴィラが男でも女でも大した変わりはないさそうだから。

「ん?どうしたのじゃシイ?」

「・・・んーん。なんでもないっ!ちょっと考え事してただけだよ!
!」

「そうか、ならよい。もう暗くなってきておる、早く宿を探さぬと
泊まれなくなってしまうぞ???」

「はい。じゃ、いこっか」

麟は残して。

「てかホントに奢ってくれるの???」

「もちろんじゃ！こう見えてもお金はまあまあ有るからの！！」
「ヤタ」

うん。そうだ。ヴィラはヴィラだから。男でも変わんないや。
ていうか出会ってまだ少ししか経ってないから、早いうちに知れて
よかった。

これからだいぶ一緒にいるんだから・・・

ってアレ??

なんか変だ。何でボクがヴィラと一緒にいなきゃいけないんだ??
ヴィラは好きだけどコレは夢でしょ??もう少ししたら目が覚める
に決まってるのに。

「お、あそこにいる宿屋があるぞシィ！！」

「・・・へ??あ、ホントだあ」

「部屋はシィで一部屋とリンと我で一部屋で合計二部屋でいいかの
??」

「え?あ、うん。」

そっか、ヴィラは男だった。あんまり可愛いから時々忘れちゃう。

「じゃあさっさと部屋を借りてしまおう。明日も早いからの！」

そう言っただけでヴィラは走っていった。

でもボクはさっきの違和感が気になってしばらく立ち止まっていた
んだ。

少しして、そしたら丁度いいトコロでこの夢から覚めちゃって
変な夢だったね?って隣と話して、そうなると思ってたのに。

なぜボクはあんなことを思っただろう??しかも不思議だけど
あの言葉には確信があったんだ。よく分かんないんだけど。ってか

口に出してはないんだけどさ。

いくら考えてもその答えは出てこなくて、
モヤモヤがなくならないままボクはヴィラのとってくれた部屋の少し質素なベットに横になった・・・

E p i s o d e ?

「不思議な気分です」(後書き)

さあ、次話をどうするか・・・オイ

E p i s o d e ？ ・ ？ 「俺等のユメ物語」(前書き)

すごく短いです。

そして麟の思ってることがでているだけです。

しかもシリアスっぽいんです。なんか。

読む必要もなさそうです。なんか。

ま、いいや。

こんにちは。麟です。あ、誰に挨拶したんかは秘密やで??
さていきなりやけど今、俺は何をしてると思います？

正解はおいてけぼりです。

あ、自分からおいてかれてるわけや無いから正解にならんわ。
実際言うつとさつきしいに力いっぱい殴られた腹が痛くて立ち上げられ
んだけやから。

段々痛みは引いてきたけど。

よし、もう立ち上げれる！さつさと追いつかんとっ！

ってしい??何であんな所に一人でおんのやる??なにやら深刻そ
うに考えてるわ。

・・・どーせしいの事やから勝手に悩んで
勝手にスッキリしてくれるんやろーから気にせえへんけどな。
でも考えてることはなんとなしわかる気がする。

しいは此処の世界のことを俺等がみてる夢だと思ってるんやろな。
せやから考えてんのはいつになったら目が覚めるのか、ってな感じ
のことやと思う。

でもな、しい。

俺、その考えがなんかしつくり来いひんねん。根拠はないんやけど
な。

でも、ひとつだけ分かることがある。

たぶん此処は俺等をそう簡単に帰してくれないと思う。

これも根拠はないんやけどな、でも確実やと思う。それだけは分かる。

・・・なあしい？

俺の考えてることをお前に言ったらバカみたいやって笑うやろう。でも俺の勘がミヨーに鋭いこと、お前も知ってるやろ？？なんか良くない気がするんや。

なあ、しい。

俺等の夢はいつになったら覚めるんやろか・・・

E p i s o d e ?

「旅立ちます」(前書き)

何でこんな時間に投稿してるんでしょうか・・・
誰か分かったら教えてください・・・

E p i s o d e ?

「旅立ちます」

目が覚めたらボクは知らないトコにいた。

汚いくて小さな部屋。質素なベッド。

—— 此処はどこ??

自分の部屋じゃないことは確かだ。

でも寝る前はたしか麟と遊んでたはず・・・

「シイ?? おきてるかの??」

・・・誰?? ドアの外から声がする。

ボクよりちよつと幼くて、女なのか男なのか分からないカンジの声。
でもなんか・・・聞いた事あるような気がするのはなぜ??

「んあ・・・」

「おお、すまぬ！起こしてしまったか？リン。」

「うえ?? あ・・・いや、ダイジョーブ」

この声は・・・麟だ。

寝ぼけてんのか関西弁が取れちゃってる。バリバリの標準語だ。

ボク知ってるんだよ?? ホントは標準語喋れるクセして無理して関西弁喋ってるコト。

標準語より関西弁のほうがモテルってウワサを信じてんだろ。

「そうか、ならよかった。」

「ん、それよりしいはまだ起きないの??」

「ああ・・・今起こそうとしてるトコじゃ。」

「そか、ありがとなヴィラ。」

「ヴィラ??」

・・・あ、思い出した。此処は夢の中なんだっけ。
起きたら目が覚めてるだろーと思ってたんだけどなあー
てか夢の中で目が覚めるとかヘンな気分だ。

「シーー??まだ寝てるのかのおー??」

「しいー??まだ寝てんのかあ??このグータラ女あー」

「誰がグータラだエセ関西弁ヤロー!!!」

「うわッッッ!!」

なんてヤツだ!年頃の女の子にグータラだなんて!!

エ??何をしたんだって??

ドアを蹴破っただけだよ。でも

正面にいる隣にドアを当てようと思ったんだけど避けられちゃった
みたい。

おしかったのになあ」

「ッなにすんだよ!!」

「関西弁が取れてますよって忠告してあげてるだけなのにいちいち
やかましいんだよ。」

「あ、ヤベ」

「今更遅いんだけどね。」

「ええねん。気分の問題やから。」

「でも作者もややこしくてウザイって言うてるよ?」

「誰の話をしてるんだよお前は。」

ボク等にとっては神サマ的存在かな?まーいいや。

「どーでもいいでしょ、そんなこと。」

「・・・まあ、なんかあんま触れちゃいけない気がするしな・・・」

まーね。

てかそれよりもっ

「ね、ヴィラ？今日これからどーすんの？？」

そーいえばボク等に行くあても金も目的も何にも無いのだ。
つまりだね？

ボクはあわよくばヴィラの旅のお供にしてもらおうと思っているのだよワトソン君。

・・・ワトソン君って誰だ。

「うむ、我はこれからセルリアン国に向かってからアブリコットという国へ行こうと思っておる。」

「あ、あぶりこつと？」

「そうじゃ。セルリアンよりは小さいが豊かでいい国じゃぞ」

「・・・そか。」

「ねえヴィラ・・・」

「ン？なんじゃシイ。」

「ボク等さあ・・・街に着いたはいいんだけどあ・・・」

「??？」

「目的、とかお金とか無いんだよねえ・・・だからさあ・・・」

「も、目的もなくお家を飛び出してきたのか??」

「そおーなんだよねー、だからさ？これからどーすればいいのかなあ??ってね、」

「うおう・・・」

「考えてるんだけどね、なにぶんこころ辺のこと良く知らないしい??？」

「・・・」

ヴィラはだんまりだ。ボクが言いたい事分かってくれたみたい。そしてたらアト一步だ!!

少し上目遣いで両手を合わせてお・ね・が・い♪のポーズ。

「はぁ・・・しかたないの。シィ、我についてくるか??」

「おお!! アリガトウ、ヴィラ!!」

「えゝ、俺は!？」

「リンももちろん一緒じゃ。こうなったら連れて行くしかあるまい。」

「う・・・すみません。」

よしっ!! これで少しの間は安泰だね♪

麟は責任カンジてるっばいけどボクは関係ないし。うん。

「ふう・・・じゃあセルリアンに行くまでに必要な荷物だけ買ってさつさと出発するぞ?」

「あいあいさあゝ」

「御お意。」

「・・・じゃ、いくかの。」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「大体買ったの。ではセルリアンへ行くか。」

「せ、セルリアンってトコまでにはどのくらいかかるの??」

「急いで1日。ゆっくり行って3日くらいかの。」

「え?? じゃあ夜寝るときはどないすんのや?」

「そのエセ関西弁やめろ」

「うつさい。」

「夜は近くに集落など無いときは野宿じゃな。」

ふーん。大体は予想してたけどホントに野宿なんだあ。

ま、当たり前だわな。

町を出てしばらく歩いてると森があった。まあまあデカイ。

しかもなんか出そうな、異様なオーラが出てる。

「うお……」

「なんかココ……やばくないか??」

「そんな感じはするが……さ、行くか。」

「エ!? 森の中に!? ちょ、遠回りしてっても良いじゃん!! わざわざこの中はいらなくてもっ!!」

「遠回りすると時間がかかる。大丈夫じゃ。我はいつもこの道を通つておるぞ??」

「えゝなんか信用できひんわゝ。こんな森ん中つちゆうたら

絶対なんか出てきいひんと逆におかしいもん!!」

「大丈夫じゃて。そんなうわさは一度たりとも聞いたことは無いからの!!」

「あ、ちよつと!! ヴィラまってよおゝ」

「えーマジで入るんかいな……って置いて行かんといてッ!!」

渋々ながらもボク等は薄気味悪い森の中へ入っていくのでした。

こうして物語は着々と進んでいく。肝心な事はすべて後回しにして・

・

E p i s o d e ? 「旅立ちます」(後書き)

あ、ミナサマ、あけましてオメデトウございます。

今年も？ヨロシクお願いします。

今年中に完結できたかなぁ〜と思ってるしだいであります。

E p i s o d e ?

「敵？が出現します。」

木木木木木木。

見渡す限り永遠と続く木々。

静。

風が吹くたび揺れる木の音以外、なにも聞こえない。

それらがさらにボク等の恐怖心をあおる。

・・・てかマジで怖いんですけど。

何でこんなに暗いのさ！？何でこんなに静かなのさあ！！

森ってリスとか狐とかウサギとかがいるんじゃないの？

しかも誰も喋らないしさあ、ヴィラの歩くスピードが異様に早いしさあー！！

・・・疲れた。森だけあって地面が凸凹してて歩きにくいからいつもよりも疲れる・・・

てかマジで誰か喋ってよ・・・今喋ってくれたら100円あげるからね？？

これじゃストレスがたまっていくだけ――

「誰じゃー！！」

うおっ！！ビックリした！！いきなり叫ばないでよヴィラあー・・・
・・・だ、誰かいるの？？なっんも見えないんですけど？？

「そこに居るのはわかっておる、大人しく出て来い！」

『フッフッフ・・・』

「！！！！」

い・・・今、すごく不気味な笑い声が・・・？

「この声・・・貴様【災いを呼ぶもの】か!？」

『ほう・・・我らの事が分かるのか。【聖なる使者】だな?？』

「お、【災い^{おまえ}を呼ぶもの】には関係ない!」

『ハッ酷い言われようだな?』

「【災いを呼ぶもの】の癖して何を――」

「ハイ!ちよつとストロップ!!!!!!」

これじゃ永遠に終わらない気がしたので強制終了。

てか、姿が見えないヤツ相手によくそこまで会話が続くね?オネーさん感心しちゃうよ。

「・・・どうした、シィ。」

「『どうした』??何言ってるんのさヴィラ。ここで会話とめないほうがおかしいよ」

「??」

ブチ

「だ・か・らあ!!さっきから言ってる【災いを呼ぶもの】って何!？」

って聞いてんのオ!!何なんだよこの声!!」

ブチ

「あ、ああ・・・そうか。どっちみちお前には関係ないことじゃ余計なことに首を突っ込むな。2人は下がっておれ。」

ブチィッ

『ほう、そつちのは人間か。しかし我等の事は会って分からずともママに少しは教わらなかったのかあ、人間?？』

ブッチイッツン！！

「・・・うるさいなあ・・・どいつもこいつもお・・・」
「げっ、しい！？」

もーいやだ、こんなトコ

『五月蠅い・・・だと？生意気な口を利く人間風情が・・・』

何でボクがこんなトコに居なくちゃならないんだ。

「シ・・・シイ??」

何でボクが得体の知れないものにまで馬鹿にされて此处に居なくちゃならないんだ？

「お、おいつ！！しい！！」

夢ならすぐ覚めると思ってた・・・だけど分かる。此处は現実だ。

「どいつも・・・こいつも・・・」

確信はないけど、歩いたときの疲労感、おなかがすいたときの空腹感、

「どいつも・・・こいつもお・・・！！」

そしてボクの感覚器官すべてが此处は夢なんかじゃない、現実だ。

と告げているんだ。

「どいつもこいつもおー!!!」

「ヒッ！」

・・・視界の端っこに木の陰に隠れようとする鱗の姿が見えた。

「どいつもこいつもツ五月蠅いんだあああああああああああああああああああ
ああああああああ!!!」

そう叫びながらボクは一番手頃な物を掴んで木で暗がりになってる
トコへ投げた。

「ドッ」

何かに刺さった音がした。ちなみにボクが投げたのはピーコックで
買った果物ナイフだ。

その瞬間――

『ギヤアアア!!!!!!!!!!!!』

ものすごい悲鳴を上げながら何かが落ちてきた。

あ、わかった。

黒い色して変な羽生やしてるけどただのコスプレ変ヤローだね。

ほら、よく秋。原とかにいそーな・・・いないか。

『ぐおおおお人間風情があああああー!!』

・・・ま、誰でもいいよね、そんなもの。気になんないし。

ホントはキモチ悪いから近づかないのが一番いいんだけどそうも言
ってらん無いからボクは

果物ナイフが頭に突き刺さって痛いからなのかよく分からないけど
地をのたずり這い回ってる

【災いと呼ぶもの】とか呼ばれているらしいヘンなオッサンの所へ

行き、

『ぐあああ！！！！！！』

思いつき顔を踏み潰した。

大丈夫。こんな化け物踏み潰したっていいんだよ。

きつと魔物を倒した勇者とかで祭り上げられるのが落ちだって。
ン??もいつちよいつとけて??よし。

『ギヤアアア！！』

『グアアアア！！』

『ぐっほお！！』

『ガハアツ！！』

『ぐあツツ！！』

五月蠅いなあ・・・いちいち声あげないでよ・・・

まあ、いいや。こいつはこんくらいにしとこう。でっつとお次は――

「パッアン！！」

「！？」

足元で何かが光った！！

っと思ったら変なオッサンがだんだん透けて・・・！？

「うえ！？」

『う、うああああ！！浄化するううう！！』

「何！？浄化じゃと！？」

「え、何??浄化って何や、え、浄化って成仏のことか！？」

『ぎゃあああ浄化しちまううー!!』

「うわー!!段々体が無くなってってる!?!」

『ぎゃああああ・・・あ・・・!!!』

「ボンッ」

「き・・・消えちゃった。」

「何だったんや今の・・・??」

「・・・」

「「ヴァー・・・説明・・・」」

「・・・おう」

E p i s o d e ? 「説明してもらいます」(前書き)

あー

おそくなっちゃたあ・・・

でも読んでる人居ないからいいよね？

・・・自分で言っておいて悲しくなってきた・・・

もし、読んでる人がいたならスイマセン！！遅くなりましたあ！！

いなかったら・・・私が悲しいだけですか・・・ww

Episode ? 「説明してもらいます」

この世界は大きな壁で2つに分けられておる。

その大きな壁は【DISTINCTION ^{くへつず} A ^る WALL ^{かへ}】と、呼ばれておって

2つに分けられた世界の住人を混合させない為のモノなのだ。

その2つの世界には1人ずつ【守神】^{モリガミ}と呼ばれる者がいてな。

代々【守神】になった者はその住人が【DISTINCTION

A WALL】を越えていかぬよう、

監視する役なのだが……

「我等が今いる世界の【守神】様は素晴らしいお方なのだが、壁の向こうのほうの

【守神】様がどうも怠け者らしくてのう……監視役を怠けているらしいのじゃ。」

「どんなカミサマやねん」

「そのため最近あちらの世界の住人がこっちに抜け出して来たりしてるらしいのじゃ。」

「なんともはた迷惑な話だねー」

「あちらの世界の住人は少し特別でう、まあなんとうか……魔物のような体つきをしており

凶暴な性格なのじゃ。生き物とみると見境無しに襲う習性があるらしいのじゃ。」

「こわッ!」

「あ、もしかしてさっきの奴がそお?? たしかあ……【災いを呼ぶもの】……とかいってたね」

「そうじゃ。実は彼らのことはこの国に住む殆どの人々には教えておらぬ。」

面白がつて近づかぬように秘密にしておるのじゃ。」

「そのの？あ、じゃ、もしかしてアイツがいつてた【聖なる使者】
つてのは・・・」

「ああ。本当のことを知っておる人々の事を総称してそう呼んでお
るの。」

ふーん。大体分かってきた。

でもネーミングセンス無いなあゝ

ボクだったらもっとカッコイイ名前付けるね！！

「ん、しい？？な、なにニヤけとるん？？」

・・・へ？？あ、ちよつと変なこと考えてた・・・

いけない、いけない！！

「別に？なんでもないし」

「うわつ冷たつ！！もうちよつと優しくしてくれてもええんちゃう
か؟؟？」

「は？なんでボクが麟なんかに優しくしないといけないのさ。」

「ヒドッ！！なんてこと言うねん！！」

「五月蠅い。黙つて。」

「・・・へーへー、分かりましたよう。」

「分かったならいい。逝いつてよし。」

「ちやう！！漢字がちやう！！」

「あー分かった分かった。私がわるう御座いましたあ！！もうあつ
ち行けお前え！！」

もお！

会話がいつまでたつても終わりやしない！！

話をもどさないとお・・・

「あ、じゃ、話戻るけどヴィラはその【聖なる使者】の中に含まれ
る人つて事で、おけ??」

「まあ。我の一族は皆、【聖なる使者】として秘密が他に漏れぬよう監視してある。」

「へ？じゃあホントはさっきの話は俺らに話しちゃいけなかったんぢやうの？」

「いや、主等は【災いを呼ぶもの】の姿を見てしもうたのじゃから我が話さなくともいずれ知る事になるからの。今教えても支障はあるまい。」

「ふーん。ボク等だからって理由じゃないんだあー・・・？」

「え、いや、そーいうわけじゃ・・・！！」

「えゝほんとお？？」

「ほ、本当じゃよ！！この国の【守神】にちかつての！！」

「アッハ」そこまで必死にならなくてもいいよお、からかっただけだから」

「な・・・！！」

ヴィラは呆然としてる。

ふっふっふボクはこの顔を見るのが大好きなんだよねえ」

なんかすっごい間抜けズラじゃん？？それが面白いの。写真とか撮っておくとさらにGOOD」

「お前ってやな性格やなあ・・・」

「うるさい」

「さあヴィラ！！ささつと先に進まへんと夜になってまうよお！？」

ごまかしたな？コイツ・・・

「おお、そうじゃな。集落などを探しておかないと夜【災いを呼ぶもの】なんかに

襲われたらたまったもんじゃないからの。」

「あゝたしかにね」

「さあ、いくぞ？」

そういつてボク等はまた歩き出す。

黙々と。

黙々と。

黙々と。

黙々と・・・

「つかあれたあ————————！！！」

「うつさいわ！まだ30分くらいしか歩いてへんやろ！！」

「ちがいますうゝ、もう一時間は歩いてますうゝ

てかその間誰も言葉を発しないってどーゆうことよお！？」

「さつさと村見つけんとヤバイ言うとするやろが、聞こえんのかいな。
老化進んどるとちやうか」

そんなの知ってるのー。でも僕は疲れたのおー。もおっ！

「人は生まれたときから老化してますうゝ、隣バカじゃないの？？」

「しいのは格別早いツちゅーとるんじゃボケ」

「お生憎様。昔っから成長が遅いつて言われ続けてるけど何か？」

「自慢げにいうなや！！遠まわしにまだまだガキやって言われとんのやぞ！？」

「知ってるもん。だから何よ？悪い？」

「え、いや、悪いかどうかは知らんけど・・・」

「じゃあ余計な口出ししないでよね！！」

「あ、ああすまん・・・つてか俺何時口出した！？」

「そんなのどーでもいいじゃん。過ぎたことは気にしないっ」

「気にしないっじゃなくて！！最初ん時とまったく違う話になってない！？」

「最初何話してたっけ??」

「え、そりゃあ、その・・・なんやっただけ・・・?」

「やっぱこういうときには話を逸らすに限るよねー」

「ってかこんなの引つかかるのは麟だけか。」

「シィ・・・リン・・・もうちょっと緊張感を持ったらどうじゃ・・・」

ボクと麟の少し前のほうでボク等のほうを振り返りながら呆れ顔のヴィラがボソツとつぶやいた。

呆れ顔ってゆーか諦めた顔、かな??

「しいに緊張感求めるほうが無茶や」

五月蠅い麟。お前には言われたくない。

「そ・・・そうなのか・・・」

ちよつとそこ。ヴィラさんや。オドオドしながらも納得しないでくれるかな。

「ま、まあ私の記憶が正しければもうすぐ小さな集落があったと思う。」

そこにつけば宿は確保できると思うからもう少しの辛抱じゃよ!」

「ボクヴィラが思ってるほど駄々っ子じゃないから、そこまで必死になだめてくれなくてもいいから」

「そ、そうか。すまぬ」

「いや、素直に謝られてもヴィラにそう思われてたって絶望感が増すだけし!」

「あ、す、すまん!・・・あつまた!」

「・・・はあ、もーいいよ。ヴィラ」

「う、すまん・・・ああッ!!また!」

「・・・」

「・・・」

「さき、進もうか。」
「・・・ハイ」

E p i s o d e ?

「朝起きたらグダグダでス」(前書き)

雫は口が悪いです。

今回はギャグでギャグでよく分かんないです。

読まなくても物語に支障はありません。

まあ、息抜きみたいなものですかねー？

という軽い気持ちで書きました。

Episode ?

「朝起きたらグダグダでス」

「ん・・・」

目が覚めると知らない天井が見えた。

・・・ちがう。

しってるわ。

詳しくは”知らない天井が見えた気がした”だ。

っていうか寝起きからなんてどーでもいいことを考えているんだボクは。

あの後やはり黙々と、しかもさらにスピードを増して歩きだしたボク等は

日が沈む前になんとか小さい集落を見つけ汚いテントをかしてもらった。

寝心地はまあまあだけど夕食が缶詰づくしってのがいけなかったのかな？かなかねむれなかった。

で、今さっきのようなくだらないことをグダグダと考えていたんだけど・・・

いつの間にか眠っていたみたいだ。

ああ、だから寝る前の記憶がなんだか曖昧なのか。

こうしてグダグダ考えてても無駄だからしかたなく外に出てみる。

外は微かに明るく、太陽さんはまだまだ昇り途中だった。でも

テントが張ってある場所の目の前にある少し大きな湖に光が当たって輝いてるのがきれいだ。

てゆうかなんでこんな所にテントなんて張ってるんだよ。

景色はきれいだけど水辺だから、寒い。めっちゃ寒いぞ。オイ。

そんなことを思いながら湖に目をやるといつもの見慣れた人影が見

えた。

「あ、麟ー、おはよおー！」

「ん・・？おーおはよ。ちゅーか珍しく早いやないの。雪でも降るんちゃう？」

そう言いながら振り向く麟はまだちよつと眠たそうだった。

「うるさい。大きなお世話だっ！！それと今日は快晴ですよ。見てわかんないスか」

「モノの喻えやないスか。こないな日に雪なんか降るわけないツス。常識ツスよ」

「お前常識って言うけど常識ってどの位の所から常識になんだよ。非常識と常識の境界線がわかんないね！！」

「・・・」

はっ！どーせ分かんないだろ！！ボクもわかんない。

アレってほんと何処から常識って言うのかな？人によって違うだろ、アレ。

「・・・」

【常識】一般の社会人が共通にもつ、または持つべき普通の知識・意見や判断力

【非常識】常識のないこと。常識を欠いてること。また、そのさま。

「な・・！！何でお前そんなこと知ってんだよ！！おかしいだろ、その知識！！」

「ちなみにY A H O O！辞書の国語辞書から抜粋」

「知らないよそんなの！！っていうか知りたくもないわ！！」

くそっ！なんだよコイツ、余計な知識身につけやがって！

これじゃボクが馬鹿みたいじゃないか！もお！！

「じゃ、じゃあ普通って何だよ？普通が分かんないや意味ないじゃんさっ」

よっしゃ突破口おっ！！どーだ燐。わかんねえよな？分かりませんって言えよオラッ！！

「【普通】特に変わっていないこと。ごくありふれたものであること。それがあたりまえであること。」

「だからなんで知ってるんだって！！何を考えてたらそれを調べようと思うのかわかんない！大丈夫かよお前え！！」

「・・・大丈夫ツス——「じゃあアレな！？あたりまえ。当たり前って何よ？」

「・・・【あたりまえ】「当然」^{とうぜん}の当て字から生まれた。

そうあるべきこと。そうすべきこと。また、そのさま。」

「・・・！！じゃ、じゃあ「当然」！！当然って何よ！？」

「【当然】そうなることがあたりまえであること。道理になっっていること。また、そのさま。」

「・・・“そうなることがあたりまえであること”ってまた戻ってんじゃない」

「俺、馬鹿なんでよくわかんないツス」

「そーいう時だけ敬語使ってんじゃないよキモチ悪い！！」

「He was dismissed as a matter of course（訳、彼は当然解雇された）」

「・・・だからなんだよ！？っていつか何したんだよソイツ！！当然って何！？」

「I don't know（訳、私は知りません）」

「自分で言ったくせにそれは知らないんだ！？つか英語めんどくさい！！日本語しゃべろーよ！？」

「俺、しいがココまで英語できるなんて知らなかったッス」

「五月蠅い！！よけいなお世話だよッ！！」

「ここまで言うてもそこまでレベル高くないけどね」

「しつこいわ！！っていうかじゃあ言うなよ！！つか関西弁取れてるし！！」

「あ、ヤベ」

「いまさら遅い……」

Oh! No

「おう！のおう、じゃねえよめんどくせえ！！」

「しい、言葉使い悪い」

「誰のせいだ――――！！」

!!!

ハアハア・・・ふう、
疲れた・・・

マジ朝からなにやってるんだボクは。　　というかボク等。

「……何やつとるんじゃ、2人共……」

「！！！！」

後ろを恐る恐る振り返ってみると案の定、ヴィラが呆れ顔でこっちを眺めていた。

・ ・ ・ み、見られた ・ ・ ？

「ヴィ、ヴィラ？いつからそこに……」

「えと、常識と非常識のところくらいからか?」

つまりほとんど最初ツから・・・？

最悪だ
・
・
・

ホントに、最悪だ・
・
・

E p i s o d e ?

「違和感」(前書き)

隠れて投稿。

見つかったらヤバイww

今回からサブタイトルがですます調じゃなくなります。
まちがえたんじゃないです。ハイ。

太陽の光に照らされた道。

道行く人たちを引き止める商人の活気ある声。

あちこちに張り巡らされ、整備された水路。

住民に快適な時間を与える建物たち。

それらの中央にはまるで絵本にでも出てきそうな、立派なお城。

そして城のてっぺんに備え付けられた

今、12時を知らせようとしている大きな鐘。

——森を抜けるとそこには、大都市が広がっていた。

■ □ ■ □ 1時間ほど前 □ ■ □ ■

ザッザッザッ

枯葉や腐った木の枝を踏む音が聞こえる。

今、ボク等はまた森の中をひたすらに黙々と歩いている。
気分はもちろん最悪だ。

「わああああー！！！！す、済まないしい！！我もふざけが過ぎた、

本気で謝るから許してくれんか！？」

本気で・・・？

「本気で・・・ってことはこれまでの本気じゃなかったコトお？」
「ヒイ！！や、それはじゃなっ」

あたふたとしながら必死に言い訳をしようとするヴィラ。

そう、こーいう人が慌ててるのを見るのがボクは好き」

「あ、そこまで気にしてないからそんなに焦ってくれなくてもいいよー」

「え」

ついでにこのポカンとしてる顔を見るのも好き。

「最悪な性格やな」

「お褒めの言葉どーも」

「褒めてへんわ」

それくらいボクだって分かる。なめるな。

「しってるもーん」

「なんや、日本語も通じひんようになったんかと思うたわ」

「ハッ、人を見る目が落ちたんじゃないの？」

「そないなもん、しいとつるんどる時点でないわ」

「それどーいう意味よ？」

「わからん？わからんかあ？」

「リン!!」

うおうッ!!び、びっくりしたあ・・・いきなり大きな声出さないでようヴィラ。

「そんなこと申してシイを怒らすな!!・・・我は助けんぞ?むしろ真っ先に逃げるぞ?」

そんな恐怖の目でこっち見ないでくださいよヴィラさん。あなたボクを何だと思ってるんですか。

「そ、そうか。すまん、忘れとツ・・・たわ」

麟、笑うな。

「はあ・・・そんなこといつてないで先、進も?」

「お、おう!そうじゃな、この調子で行くとあと半刻もすれば森から出られるぞ」

・・・?

は、半刻って・・・

「あ、ちよお待ちいヴィラ!!」

何も問題ない、というように先へ進むヴィラ。

「・・・半刻って??」

「た、たしか1時間やと思うけど・・・」

「い、今時半刻って言わないよね?」

「いつでも通じひんと思う」

「そりゃそうだ」

ぐんぐん進むヴィラの後ろで聞こえないように麟と話をする。

俗に言う内緒話というやつだ。ハハハ、はじめてやった。

・・・いやはじめてな訳ないじゃん。

学校の“校長先生の話”の時間なんか

校長の頭の毛があと何年でなくなるか麟と本気で予想しあった。
たしかあと14年ちよいつて結論にいたったんだっけ？

「16年や。そんなんも覚えられへんのかい」

うるさい、人のココロをよむな。

そんなくだらないコト覚えていられるワケないじゃん。
ボクは麟みたいにヒマじゃないんだ。

「しい、当たったら何かおごってくれる言うたやろ

・・・まさかそれも忘れた言うんやないやろな？」

「・・・そのまさかデス」

「・・・こーなと思うたよ。せやけど大丈夫や、“契約書”があるさかい」

「チツ、みみっちい男やなア・・・」

「ん？なんかゆうたか？しい」

「へ、ううん、なんでもない」

やつば、本音でた。

「ならええわ」

何とかごまかせったばい。

やつば余計なことに気いまわしてないで歩くほうに集中したほうが
いいな。

やばい事言う前に会話終了させよっ！！

「さ、ぐんぐん進むぞー！！！」

そう叫びながらヴィラの横に出る。

隣の隣にいとまた話し出しそうだったからだ。

そして一回、深いため息をすると前を見、足を大きく前に出した。

——これが一時間前だ。

「うわぁ・・・」

今、ボク等は森の出口に立って足元に広がる景色に目を奪われている。

そう、足元だ。

冒頭に記したとおりの大都市は文字どおり、足元の崖下に位置していた。

「キレー・・・」

「でもあそこまでどうやって降りてくん？ヴィラ」

「・・・」

「ヴィラ？どーかしたの？」

「何か問題でもあるん？」

「・・・かったぞ・・・」

「「え？」」

ヴィラが何か言ったが声が小さく、よく聞き取れなかった。

やがて、きょんとした顔をしながらこちらを見て口を開いた。

「この・・・セルリアン王国は崖下になど、なかったぞ・・・？」

ソナノイワレテモコマルヨ・・・

E p i s o d e ?

「違和感」(後書き)

たぶん次も結構遅れると思います。
隠れてやってるんでww

E p i s o d e ?

「驚異的能力と降下」(前書き)

うーん・・・

とりあえず登校。じゃなくて投降。

二人とも何か難しい事を考えているみたいでだんまりだ。
・・・でもさ、

「・・・とりあえずあそこまでどうやって行くか考えようよ?」

「・・・ハイ」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「やっぱ滑り降りるしかないかの?」

とりあえず階段かなんかがあるか探してみる事にしたボク等は
半径1?四方を探してみたがそれらしいものは見つからず、またも
との場所へ戻ってきた。

「そ・・・それってムリじゃね?」

ヴィラの無謀な提案を少し引きながらの笑顔で答える。

え、だってフツーに考えて無理でしょ、

こんな10メートル以上ありそうな崖を滑り降りるなんて自殺しよ
うとしてるのと同じだよ。

「そうかの?頑張れば何とか・・・」

「イイイイイヤ!!そんなん自殺行為やで!?!万が一死ななかった
としても骨折は確定やし!!」

本気で考えだしたヴィラを麟が必死に止める。そりゃそうだ。

するとヴィラがむうつとした顔でこっちを睨みつけながら口を開い

た。

「・・・そこまで言うのならかまわん、主らはそこで見ておれ！
私の驚異的な身体能力に腰を抜かすがいい！！」

それだけ言うとヴィラは崖の下に消えていった・・・え？

「ちょ、ヴィラッ!？」

崖下をのぞくと・・・

そこには崖の少し飛び出た所を足場にし、
軽やかなステップで普通に下に降りていくヴィラの姿が！！すげえ
！！

トツ、と地面に着地し、こっちを見上げるヴィラ。その顔はそりや
あもう自慢げで・・・

「どおーだ！！我等【聖なる使者】の身体能力を甘く見るなよ！！」
と、えらそうにふんぞり返っている。

というかボクは【聖なる使者】とやらを甘く見た覚えは無い。

「ヴィラが凄いのはわかったさかい、俺等がどうココから降りれる
か考えてくれー」

「むっ・・・仕方ないのう、長い綱でも探してくるかの」

ヴィラは隣が軽く流した事を不満に思ってるみたいだったけどどっ
かに縄を探しにいつてくれた。

・・・どっか??

「おい長い綱あつたぞー」
「はや！ー！」

ココから降りられる長さの綱なんて早々あるもんじゃないと思うんだけど・・・？

「じゃあ投げるぞー」

そう考えてる間にもヴィラは縄の先に石をくくりつけてこちらへ飛ばそうとしている。

「えいつー！」

男の子とは思えないような可愛らしい声を出しながらヴィラが投げた縄にくくりつけられた石はキレイに弧を描きながら・・・麟の頭に直撃した。

「あイタッ！ー！」

なんてベタな・・・

「さてと・・・これをどこかに結び付けて・・・」

だが、そんな麟を心配するほどボクは優しくはなかった。
お、あの木なんて頑丈そうでいいや。

「できたよー。麟、おりてみ？」

「うええ！！？オレか！？実験台か！？」

「つべこべ言わない。さっさと降りる」

「・・・はあい」

鱗が嫌そうにしながら縄を握り、降りていく。
お、なかなか丈夫だなーこの縄・・・

「ブチッ」

「「あ」」

「しいテメえーーーー！！！！！！！！！！」

死に際の雑魚キャラみたいな落ち方していったぞ、アイツ。

確かにボクが縄をツツいてたから切れてしまったのかもしれないが
とりあえず言っておこう。アレはボクのせいじゃない。

「・・・いッとおっ！！！！！！！！！！」

「おー・・・」

鱗もなかなかやるな！。

どうやらアイツは受身を取って力を外に逃がしたようで、ほぼ無傷。
そもそも途中まで降りていたからかもしれないけど

やっぱりあの高さから落ちたら普通は無傷じゃすまないと思う。い
つの間にあんな技を・・・？

さてと・・・

「「「・・・」」」

「どーすんだよ鱗」

「オレのせいかな！？！？！？！？」

厳密に言えばボクの自業自得だ。

「しかしのう・・・綱は切れてしもうたし・・・」

・・・ふう

「しかたない、」

大きく息を吸い込みながら駆け出し、

「麟！！キャッチしてよね！！」

崖に足を掛け、

「え——」

「とおうッ！！！！！！」

ボクは、力の限りジャンプした。

「え　えええ————！！！！！！！！！！」

麟のアホ面が見える、が

今はそんなこと気にしてる場合ではない。

「ガッ」

崖の側面に着地

と同時に崖を滑り降りる。

しかしこの角度じゃやっぱり無理がある。

残り3～5メートルつてところでボクは地面を力いっぱい蹴って・

麟のいる所へジャンプ。

「おおおおおおおおお！？！？！？！？！？！？！？！？」

「いッ！！」

「うお！！」

ドッ、と言う効果音を立てながら地面に倒れこむ。

「いったぁ・・・」

起き上がると麟が伸びているのが見えた。

どうやらちゃんとキャッチしてくれたみたいで大した痛みは無い。

・・・麟のほうが重症？

「だ、大丈夫か！？」

どう責任逃れするか考えているとヴィラが心配そうな顔をしながら走ってきた。

「おお、2人とも無事・・・では、なさそうじゃな・・・」

ボクの足元の麟をみながらヴィラが言う。

「まあね、あそこから飛び降りるって言うのが元々無茶苦茶だし」
「し、シイが言ったんではなのか!？」

「麟の指図に決まってんじゃないん。ボクがあんなムチャする人に見える??」

「ええ?そ、そうなのかの?・・そう・・なのか?・・?」

麟ってホント可哀想なやつだと思う。

同情してても金はあげないけどね。

そこ、ボクのせいだとかいうな。

「う・・」

麟が起きたみたいだ。いつも思っけど麟って頑丈すぎだよね・・

「う・・ん?あー・・しい??」

どうやら少し記憶が飛んでるみたい。好都合、
よつと、立って麟を見下ろす。

「あれ?何でオレたおれて・・?」

「そんなことはどうでもいいじゃん。さっさと中入ろ?」

そう言いながら、セ、せるりあん?王国を指差す。

「そんなことって・・」

ヴィラがボソツといった気がしたがほつとく。うん。ほつとく。

「・・・あれ?何でしいココにいるん?上にいたんじゃない」

「さー!!行こう、すぐ行こう、さっさと行こう!」

「なんや、そのテンション・・」

麟に向かってニコツと・・・じゃなくてニヤツと笑ってごまかす。

「行こ？」

これは脅しである。

「おう・・・」

その答えは恐怖と呆れが入り混じった感じがした。
ううん、そんなことは気にしなくてもいい。

ボクはもう一度せる・・・りあん王国のほうへ向き合い、
こんどはヴィラが好奇心の満ち溢れた声で言った。

「さあ、行こう！..」

太陽の光に照らされた道。

道行く人たちを引き止める商人の活気ある声。

あちこちに張り巡らされ、整備された水路。

住民に快適な時間を与える建物たち。

それらの中央にはまるで絵本にでも出てきそうな、立派なお城。

そして城のてっぺんに備え付けられた、大きな鐘。

「うん、上から見たとつりやね」

麟が周りの景色を見ながら感想を述べた。

「もうちょつと怪しいカンジが漂ってたらテンションあがるのに・・・」

「テンションあげる必要ないと思う」

「けち臭いコト言わないでよ」

「何がけち臭いねん」

わかんない。

「でも町が沈没したらもつとみんな恐怖な顔してなきや・・・」
「恐怖な顔て何やねん!!」

「・・・沈没したと決まったわけではないのじゃがのう」
「うつ、うるさいやいっ」

2人同時に突っ込まれるとさすがにこたえるぞ？
いやまじめにさあ・・・。

「と、とりあえず街の人に聞いてみよッ!!」

「あ、逃げた」

「逃げたの」

うるさいうるさい!!

ボクは聞こえなかったフリをして街の人に近づく。

「あ、のー？すみませんが・・・」

「？、なんででしょうか？」

彼はちよつと不思議そうな顔をしながらこっちを振り向く。

ちよび髭を生やしたちよつとダンディなおじさんだ。

裏町を牛耳ってそんな顔をしていたので話しかけてみた。 テヘッ

「あの、旅のものなんですけど、一ヶ月前に来たときと

街の様子が違っていたので何があったのかと思ひまして・・・」

「何でそない遠回りやねん」

「うるさいっ」

横から口出してきた隣を一括すると相手の様子を伺う。

「・・・はい？」

何かばかんとされた。

「はははっ！！何も変わってはおらんよ。記憶違いではないのかい、お嬢さん？」

「だ、そうやで？お嬢さん」

そう言いながら麟もボクのほうを向く。

「うあ・・・」

麟と目があつた瞬間、顔が赤くなるのがわかった。

見当違いの事を言ってしまった事が、

ダンディおじさんはともかく、麟にまで“お嬢さん”と呼ばれた事か、

それともその両方なのか。

何なのかはわからないがとにかく恥ずかしさでいっぱいになった。

「ッ・・・ンのお！！！！」

だから、とりあえずそばにいた麟の背中に回し蹴りを入れた。

「いッッッッッッ！！！！」

麟は背中を押さえながらヴィラの所まで逃げる。

そして、

「何すんねんこの凶暴女あッッ！！！！」

とほざきやがった。ガキかアイツは！！

・・・でも、ちよつと恥ずかしさは薄れたかも。

ああ、これが災い転じて福となすってヤツか。あ、なんか違う。福となつてない！？

「して、お嬢さん。聞きたいことはそれだけかな？」

「え、あ、有難う御座いました!!」

そう言つて頭を下げると僕は逃げるようにその場から離れた。

「おお、どうじゃった？シィ」

するとヴィラがパツとこっちを向いて話しかけてくる。

「ちよつとヴィラ!!なんも変わつてないってよ??どーいう事だよ!!」

「ちよ、ちよつと待てシィ!落ち着け!」

「これが落ち着いてなんていられますか!!恥ずかしいったらありやしない!!」

ヴィラの嘘つき!!と、言いながらヴィラに迫る。
ほぼ八つ当たりなのはわかつてる、うん。

「し、しかし我が見たときは本当に・・・」

ヴィラがうじうじと話す。あーまたイライラしてきた!!
ヴィラが明らかに不機嫌になっていく雫を見て「逃げよう」「そう心に決めた時——」

「大変だああ——!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

町の入り口のほうから、あせったような、驚いたような声が聞こえた。

Episode 22
「大変な」

「大変だああ――――！！！！！！！！！！」

「ッ！！何じゃ！？」

「・・・大きく変なんだってさ」
「やる気なさそうやんなあ」

やる気なんてボクが持ち合わせる事はほとんど無いけど??

「他人なんて知った事か。勝手にやってろってカンジじゃん？」

「まあ、右に同じく」

「ええ！？そこは気にしないといかんのではないかの！？」

どうやらヴィラは優等生の委員長タイプのようなのだ。

「いや、他の人に気いまわせるほど余裕ないし?」

「シイの場合は機嫌が悪くてめんどくさいだけやけどな！」

「ふんふん」

「ぐほおッ・・・!!」

ひじうち。

「て、てめえ……!!」

ボクは五月蠅い隣を黙らせてから、周りを見渡す。
さっきの声を聞いた街の人たちが騒いでいる。どうやら本気で何かあったようだ。

特に入り口のほうは凄い騒ぎになってとても外に出られそうも無い。

あ、でも上から見たときにもう一個出入り口があつたはずだ
そう思い出し、ヴィラに場所を聞こうと振り返った時、あのダンデ
イおじさんが目に入った。

ダンディおじさんは騒ぎになっている入り口のほうに向かうときよどきよどしい一人の若者に話しかけた。

「は……うん……?」

「
・
・
・
・
が
・
私
・
・
・
街
・
・
・
」

うーん・遠過ぎて何言ってるのかわかんないや。
もっと近づかないと・・・

「は？どついつことだ、それは」

「で、ですから今も言ったとおり……」

よし、ここからなら聞こえる。

ダンディおじさんの表情からするとけっこう深刻な問題のようなことがわかる。

「街が……このセルリアン王国が、地盤ごと沈んでいたんです……」

あー

「……ああ、わかった。そーいうことね。うん。」

「ッて今まで気づいてなかったんかいいいいッッ!!!!!!!!!!!!!!」

「とは言わないよ。」

「言えたらスッキリするんだろうけどね・・
って言うか言えない。」

「驚きすぎて次の行動に移れない。」

「あれ、なんや、気づいてなかったただけやないか」

「……ッッふわあ!!!!!!!!!!!!!!」

「わっ、な、なんやねん、いきなり大きな声だすなやあ・・」

「……り、隣……」

「いきなり背後に立つほうが絶対悪いと思う・・
ボクがすねてると隣がおもむろに口は開き、」

「というか今なんか可愛い声ださへんかった?？」

「などということを書いてやる。」

「気のせい」

「と、返してみるが・・」

「いや、絶対聞いたで? “ふわあ” って」

やっぱり聞こえたらしい。っていうか聞こえてたならなんで質問してきたんだよ。ああ？

「あ、ダンディおじさんがなんか言いてはるで」

こいつ話を逸らしやがった。

まあいいや、ボクもさっきの事についてはこれ以上はなしたくない。アレは一生の恥だ・・・封印しとこう。

そう思つてダンディおじさんの方を向く。

アレはなかったことにした。うん。何もなかったよ。

「うそだろう・・・？」

「う、嘘なんて吐きません！！本当なんです、私は外から戻つてきたばかりなんですから！！」

「・・・誰か外を見て来い！！今すぐだあ！！」

あーやっぱり知らなかったんだー

でも普通街が沈んだら絶対気がつくと思うんだけど・・・
ゆっくり沈んでいくわけ無いし・・・？

つていうか崖上ならここからでも見えるんですけど。

普通に見えるよ！？周り見渡せば崖に囲まれてるのが幽かだけどころかよ！？

「頭領！！く、国が丸ごと沈んでます！！」

「頭領！！！！大変です！！！！いつの間にか街が沈んで・・・！！」

「大変だあー！！！！街があー！！！！」

・うわあ、おっさん等メツチャ騒いでるよお
頭領ってもしかして・・・

「何！？本当か・・・！？」

「だから言っただですよ！！なぜか分りませんが帰ってきたらいきなり・・・ッ！！」

な！？何してんだあのおじさん！！

「うるせえよアイボリー・・・ぎゃーぎゃー喚くんじゃねえ・・・」

「と、頭領・・・ッ」

うわ・・・あのおじさんは結構背が高かったみたい
きよどきよど若者の頭をつかんで持ち上げている。

うわっ痛そう・・・力も強そう、やっぱり頭領ってダンディおじさんのことなんだあ。

「てめえら！！騒いでんじゃねえ！！原因を調べてくるんだあ！！」

「「御意！！」」

すっごー・・・

ほんとに偉い人みたいだ。さっきまで無駄に騒いでいた連中がテキパキと仕事を始めた。

「・・・おや？さっきのお嬢さんではないかね？」

つとお

油断してたらばれちゃったみたいだ。メツチャこつちを見る。

「ど、どうも」

「“どうも”って・・・」

「五月蠅い!!」

「やあ、お嬢さん。また会ったなあ」

「は、はい・・・」

こ、怖い・・・

さっきの見てたら誰だって怖くなるよね・・・?

「・・・ああお嬢さん、君には謝らなければならないことがあったんだ」

「うえッ?」

やばい、想定外のことを言われたから変な声出しちゃった・・・。

「いやあさっきの君の質問はこのことを言っていたのだろうなあ」

その一言は、独り言のようにつぶやいて、

「遠まわしだろうが異変を知らせようとてくれていた。それなのに笑ったりして、すまなかった」

「えッ!!そんな、別に、謝られるような事は何もッ!」

「ああそれと・・・教えようとしてくれて有難う」

「ッ!!」

偉い人のようなのに、

本当に申し訳なさそうにボクに頭を下げてくるのが、

ボクの2倍は生きてそうなのに

ちよび髭を生やした口元がにんまり緩んでボクにお礼を言うのが、
なんだか申し訳なくて、なんだかこそばゆくて、

「あ、あの、そのッ、そんな、あの・・・」

次に言うべき言葉が見つからない。

「すみません、コイツにはあなたのような人が頭を下げる価値は無いっすよ」

・・・と、ボクが混乱していると後ろから麟がでて来た。

「俺等はちよつと気になったからたまたま近くにいたあなたに話しかけただけっすから」

「いや、しかし・・・」

「それでも感謝してるって言うんでしたら・・・」

そうだなあ・・・と、いいながら麟が続ける。

「この国に起こってる事、俺等に教えちゃくれませんかね・・・？」

「・・・ッはっはっは！！面白い子供たちだあ！！」

また笑われた・・・！？こ、子供たちってこれでも高校生なのに！
・・・いつまで笑ってんだよおっさん。

「ははッ！！すまない、また笑ってしまったな・・・」

そんなボクの視線に気づいたのか恥ずかしそうに頭をかきながら話
す。

「いいだろう、だがこちらもまだ情報が少ない。あと一日ほど待っ
ていてはくれまいか」

「ほえ？」

「一日でできる限り情報をそろえよう、もちろん全て教えよう。そ
れでどうかな？」

「えエ！！有難う御座います！！」

調子のいいやつめ・・・
だけどこれで自分達で調べる時間が省けた。

□ ■ □ □ ■ □ □ ■

「・・・まったく、“勝手にやってろ”ではなかったのかの？」

「「うっ」」

「他人に気をかけるほどの余裕はなかったんではなかったのかのお
く??」

「「うぐぐ・・・!!」」

ヴィラめ・・・

今までボク等にいじられてばっかだったからこそとばかりに言っ
てくる。

いわれっぱなしはボクの性にはあわないのに・・・!!

「ちょ、ちよつと待ってよ!!これは麟が勝手に約束した事だもん
ボクには関係ないし!!」

「はあ!?!なんやねんその言い方!!しいが困ってそうやったから
助け舟出してやったのに!!」

「べつにボクは情報ほしいなんて一言も言っただけじゃん!恩着せ
がましいっいたらありやしない」

「しいだつて気になつてはいたやろうにせやから盗み聞きなんてし
ていたんやろうが!!」

「ツ!!べ、別に暇だったから聞いてただけだもん!!」

「どくだか??」

「なによ!」

「しいの言ってることは信じられへんって言うてるんや、ボケ」

なツ!!ボケだあー!!?この男どうしてやろうか・・・!!

なんてボクが麟の処遇について考えていると

横から見ていたヴィラがニヤニヤしながら口を開いた。

「まあまあ、痴話喧嘩はそのくらいにして、の?」

「何が痴話げんかだつてえ!？」

「うつ・・ほ、ほらいきピッタリではないか・・」

「ッ!！」

コイツ・・さすがに“マネすんな”なんてベタの言葉は言わないけど確かにこれは真似されているようで腹立つ・・!

「こら、睨み合っていないで。これからどうするか決めんといかんだぞ?」

「・・・・・ほい」

「さて、とりあえずは宿じゃな。こんなに日が暮れてしまっていてはさつさと見つけど・・」

「あ、それなら大丈夫や。さっきのおじさんが部屋貸してくれる言うてたで」

「おお、これで宿代は浮いたな。それじゃあ明日は・・」

「そー言えばヴィラはいいの?ボク等の用事でここにとどまっちゃつて」

「急ぎの用事はないし、我もこの街の事は気になっていたのだから気にしなくてもよいぞ?」

「ああなら良かった」

「ヴィラ、明日の事はあの人の話を聞いたあとに決めてもええんや

ないの？」

「そうじゃなあ・・・では、さっさとその部屋に向かうとするか」

「おう。あっちのほうやってー」

そういつて隣が街の中心のほうを指差した。

今日はいろんなことが遭ったから疲れたな・・・
さっさとベッドにもぐって、今日はもう寝よう・・・

朝起きるともう既に太陽は昇っていた。

ベッドから起き上がってダンディおじさんがどこから調達してきたらしい服を身にまとう。

襟元に可愛らしい刺繍の入ったワンピースタイプで、とても着易い。それにサイズもピッタリ。

顔を洗ってから髪を少しとかす。

部屋から出て、ロビーみたいな所に行くと麟とヴィラが話しているのが見えた。

「おお、シイ！お早う」

ヴィラがボクに気づいて話しかけてきた。

「ヴィラ、おはよお」

「あ、しいおはよー」

「おはよ。ごめん、ボク寝すぎちゃったみたいだね」

「そんなこともないぞ。どうせやる事もなかったのだ、ぐっすり寝ていたらいいぞ」

「え？あの情報くれるっていったおじさんは？」

確か一日で頑張ってみるって言ってたハズだ。

やっぱリムリがあったかな・・

「あーもう少しやって。終わるまでゆつくりしとけやと」

時間稼ぎのいいわけか、まあいいや。

遅れたらあとでいちやもんつけてやろう。

「ふーん・・・じゃーあのおじさんが戻ってくるまで暇なの?」

そうだとしたら最悪だ。

ボクは暇なのが一番の拷問だと信じてる。そしたらもう生き地獄だ。

「そうじゃのう・・・街に出て買い物でもしてよつか?」

「ピーコックで旅支度はしたんやないの??」

「セルリアンはピーコックよりも豊かじゃから品揃えも抜群じゃ」

「へえ・・・で、何買いに行くのお??」

ボクがそう訊くとヴィラは少しニヤケながら答えた。

「隣としいの、服でも買うか・・・?」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「へえ・・・ほんまに品揃え豊富ななあ・・・」

隣があたりを見渡しながらそういった。

「たしかに・・・色んなお店がいっぱいあるねえ」

お肉屋、たぶん野菜の類であろう物を扱っているお店、布屋、服屋、
占いでそうな店、ほんと禍々しい気しか感じられない店、
店の種類はさまざまで、数え切れないほどずらぁッと並んでいる。

ヴィラはそこから少し古びていてレトロな感じのお店に入っ
てい

「ほら2人とも！！そうしていると迷い子になってしまっぞ！！」
「へいへい」

「あ！ちよつと待ってよ！！」

ボクもヴィラをおって急いでその店に入る。

カランカランッ

ドアを開くと付けられていたベルが音をたてた。

「うわ・・・」

本当に、見た目どりの店。だけどそれがまた良い。

ほんわかと暖かいカンジの、過ごしやすい空気をもちだしている。

「シィ！！ほら、来てみる！似合うと思うぞ！！」

声のしたほうを見ると部屋の角のほうでヴィラが何かを持って騒い
でいる。

「ほら、早う！あ、これも可愛いぞ？」

ヴィラのはしゃぎようつたら・・・

ボクを着せ替え人形か何かと勘違いしてない？？

そう思いながらヴィラの元へと急いだ。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「・・・ちえ、なんだよう」

「はあ・・・こら、そんな汚い言葉使っちゃいけません」

「むう・・・」

ヴィラ・・・いい加減機嫌を直してよ・・・

ヴィラはさっきの店でボクに選んでくれた服を

ボクが動きにくいからと言う理由で殆ど却下したから拗ねているのだ。

ちなみに今はさすがにダンディおじさんも

もう戻っているだろうという事になってあの宿に帰っている最中だ。

「あ、あれやな」

隣言葉を聞いて前に目を向けると確かにボク等が一晩泊まった宿があった。

「せやけどあのおじさん、街が沈んだ理由分ったかなあ・・・？」
「さーねえ。もともと期待はしていないけど待たせたんだったらそれ相応の事は知りたいよねー」

「お前自分をどれだけ偉いもんやと思つとるんや」

む、コイツいちいち突っかかってくんナア・・・うぜ。

「そういうことじゃないでし——」

「「あ」」

あ？

目の前を見ると宿に入ろうとしているダンディおじさんが。

「や、やあ、君等か。ちょうどよかった」

なぜ動揺？しかも目が明日の方向を向いている。

「なんか分ったスか」

「うぐツ・・・！！ま、まあ分かった事はあるぞ。しかし立ち話もな
んだ、中へ入ろう」

そうやってぎこちなく笑うおじさんの顔は
何かの決意と不安と諦めが入り混じったように見えた。

「さ、どうぞ」

ボク等はおじさんに促され

中に入った。

「で？」

会議室のような部屋に入り、皆椅子に座ったとたん、麟が強制的に本題にはいった。

しかし凄く強引だな・・・どんだけ早く話し聞きたいんだよ・・・！！

「・・・話しましょう、分った事の全て」

おじさんが真剣な顔つきになる。

「我等はまず――

「あ、どうやってそう分かったのかとかかどおッでもいいからわかった事だけを簡潔に述べて」

「「「・・・」」」

皆黙りこくつちやったよ。どーしよ？

「あ、いや、しかし・・・」

「簡潔に述べる」

麟から白い目で見られている気がしたけどかまうもんか。ボクはめんどくさいのは嫌いなんだ。

「・・・今回の事件は、誰かが意図的に起こしたようなのだ」

なッー！！、と

ヴィラが驚きの声を上げようとしたのをボクが手をヴィラの前に出し、止めた。

「それは・・・誰かは分ったのですか？」

「いや、今のところは・・・そもそもこんなことは事実上ありえないことなのだから・・・」

そのとき、おじさんが何か言い訳をしようとしたのを麟がある意味最悪に空気の読めて無い言葉でさえぎった。

「あれ、もしかして分った事ってそれだけスカ？」

あーあ、やつちゃった・・・

「ツグハア！！な、なんて事を・・・！！」

「アレ！？凶星つか！？マジでそんだけなんスカア！？」

「グツハア！！き・・・君見かけによらず毒舌・・・！！」

「エツ！あ、す、すんません！！」

殆ど真っ白になってうなだれているおじさんに必死になって謝る麟。なかなか面白い・・・

だけどそんなトコじつくり見ている余裕はボクの心には無い。

「はあ、使えないツ！もういい、自分達で調べよっ！」

そういつて席を立つ。

「え、あ、リ、リン！行くぞっ」

ヴィラもあたふたしながらついてくる。

麟もおじさんに謝ってから駆け寄ってきた。

「おい、しいお前あの人に何やらせたいねん！」

ヴィラに聞こえないように小さい声で麟が話しかけてくる。
チツ、やっぱり分ってたか。

だってさ、アレくらい怒ってる素振りを見せておけば
お詫びとしてまたなんかやってくれるかな、なんて思ったんだもん。

「・・・悪女」

悪い女ね？結構ですよーだ。

それで世の中うまく渡れるんだったら良心なんて捨てちゃったほうがいいでしょ！

宿を出ると、太陽の光がまぶしくて思わず目をつぶった。

「ん・・・」

手で太陽の光をさえぎりながら空を見上げる。

「・・・で？これからどうするん？」

麟の声で再び前を向く。

もう目は慣れたみたいでしっかりと見える。

「うーん、とりあえずいつ沈んだのか・・・じゃろっな」

「じゃあとりあえず聞き込み――」

聞き込みでもする？と続けようとしたが、その言葉はついに発せられなかった。

なぜなら、

『グラアアアアア！！！！！！！！』

どこからともなく響いた、地面を揺らすような声に遮られてしまったからだ。

「な、何なんだこの声は・・・！！」

「どこから聞こえている！？」

「み・・・耳が痛いッ！！」

あちこちからおっさんの慌てふためく声が聞こえる。しかし、そんな事は今はどうでも良かった。

頭の中に響くようなこの声、まさか・・・！！

「【災いを呼ぶもの】か！！」

【災いを呼ぶもの】・・・あの変なおっさん！！

あんなヤツにまた会えるとは！！

どうサンドバックとしてぼこにしてやろうかとワクワクしながら周りを見渡すと

ヴィラの乾いたような、かすれた声が聞こえた。

「な、なんだあれは・・・」

そっぴいなながらヴィラは上を見上げている。

まさか・・・と思いボクも青い空が広がってるはずの上を見上げると・
・

『グギヤラアアアアアア！！！！』

「ッ！！」

茶色いごつごつした肌の、

何の生物ともいえない体つきをした、

何十メートルもあるようなモノが、頭上に顔を覗かせていた。

Episode ?? 「中ボスなRPG」

「グギヤラアアアアア！！！！！」

今、ボク等が見上げている空には
茶色いごつごつした肌の

何の生物ともいえない体つきをした
何十メートルもあるようなモノが、頭上に顔を覗かせている。

「なんなのだあの大きさは・・・！！」

ヴィラが目を見開き、かすれた声で独り言のように言った。

「・・・あれも、その、【災いを呼ぶもの】なんか？」

麟はそのモノから目を離さずにヴィラに聞く。

「たぶん、そうじゃ。だが・・・あんな大きさ、見たことが無い・・・！！」

ヴィラが見たこと無いということは、【災いを呼ぶもの】とかいう
の中でも
めったにいない奴と言う事だ。もしかしたら格別強いのかも
しい。

だがそんなことはボクにはどうだって良かった。

あの形は・・・あの大きさは・・・

「中ボス・・・!!」

「ちゅ、ちゅうぼす・・・!? な、なんじゃそれは!？」

麟とボクの声聞いてなんかただ事ではないと判断しちゃったらしいヴィラが
はじめてあの怪物から目はずしこつちを見る。

「中ボス・・・ボスの一步手前におるやつでたいていは馬鹿でかい・・・」

「中ボスを倒すにはどこかにあるであろう弱点を探して攻撃するか」
「アイツをどこかで操っているヤツをたおすかや」

麟と目をあわせる。ちゃんと分ってるじゃん。

「な、なぜそんなことを知っているのじゃ!？」

ヴィラが尊敬のまなざしっぱいものでこちらを見ている。
う・・・なんか答えにくい・・・

「あの、さ・・・ね？」

「うん・・・」

「ゲーム、好きだから・・・」

「げ、げえむ??」

ヴィラはますます混乱してしまったらしい。やっぱりゲームも知らなかったか。

でも説明する気はさらさら無い。だって恥ずかしいじゃん、なんか。

「とにかく・・・ッ!!」

鱗がどうにかして誤魔化そうとした時、地面が大きく揺れた。

ドゴオッッ!!

そんな効果音を立てながらボク等曰く、“中ボス”が動き始めた。
しかもアイツは建物とか平気で踏み潰していく。

ドゴオッッ!!

「チッ!このままじゃいつか死人が出るで!？」

「そ、そんなこといつてもッ!!」

「つーかここにいたら俺等まで危ないッ」

たしかに!!瓦礫とかもパラパラと落ちてきている。

ここに留まり続けたら傷どころじゃ済まされないかもッ!!

「ヴィラ、どーすんのッ??」

ここはボク等よりもいろんなことに詳しいヴィラに判断を任せる事にした。

逃げるとしても地形を知らないと逃げる前に見つかってしまいそうだからだ。

なるべく早く、的確な判断がほしい。

「ヴィラー!!」

いつまでも何かを悩んでいて動こうとしないヴィラをもう一度呼ぶ。

「・・・我は、あやつをどうにかする」

やがて、何かを決意したように目を開いたヴィラから発せられた言葉は
ボクを大きく混乱させる言葉だった。

「はッ!? 何言って——」

「ぬしらは逃げる!! なるべく遠くへ、すぐに!!」

「何言ってるの! 一人でどうにかできる相手じゃないでしょ!？」
「それでもッ!!」

力強く前を見据えたヴィラの目は
刺し違っても相手を倒す、そんな決意が見えたように思えた。

「我が・・・我等【聖なる使者】がどうにかしないといかんのじゃ」
「ッ!!」

「さあ、行くが良い!! 早く行かんとあやつが——」

「アホか」

ゴッ

と言う効果音とともにいつの間にか
ヴィラの背後にいた鱗がヴィラの頭にチョップを入れた。

「ッッ!! な、何をするのじゃあッ!!」

ヴィラが半ばやけくそなカンジで麟にどなる。

「なにで・・・ヴィラこそ何言うてんねん」

麟がそう返すとヴィラがキョトンとした顔になった。

ああ、そうか、麟が言おうとしている事がやっと分った。

「一人で何とかするって・・・無理やろ」

「むッ・・・！！そんなのやってみなくてはわからんではないか！」

「分るわ、それくらい。一人で何ができんねん」

「ッー！！」

ふう、とため息をついてから麟が口を開く。

「しっかたないなあ、小さな子供を置いて逃げるほど俺も鬼や無い」

もったいぶったように、ニッと笑い、続けた。

「手伝ってやるか。特別にっ！」

この男は・・・

本当に事態を理解しているのか、ヴィラもそう思うに違いない。

ボクもどちらかって言うヴィラを気絶でもさせて無理やりでも連れて逃げたい。

でも、それでヴィラの誇りが失われると言つのなら、

ボクも麟と同じ事を言うだろう。

もっとも、そんな事考えられるほど心に余裕がなかったのだが・・・

「何を言っているのだ！そんなこと・・・」

「そんなあぶない事させられへんってか？自分はやろうとしてるくせに」

「ッ！！・・・これは、我等の使命で、理由がなくては・・・」

「理由が無いと承知できひん？ならこれは恩返しや」

「え・・・？」

「服、買ってくれたやろ？」

この世の中にそんな理由で命をかけるやつはいない。と、思う。
だけどそんなことはどうだっていい。

ボク等はヴィラを助ける適当な理由があればいいだけなのだから。

「しい！」

ヴィラが困惑して考えをまとめようとしている間に麟がボクに声を掛けてきた。

「しいはどうする？逃げるなら・・・」

悪いけど一人で、とでも続けるつもりだったのだろうか。
でも、その先の言葉はボクには必要なかった。

「誰が逃げるって？？そんな事言ってる暇あったらアイツどうするか考えな！」

ボクがそう言っていると麟は呆れたように頭をかいた。

「まったく・・・それが人に物を頼む態度かいな」

「頼んでないもんっ！命令だから」

「そーかい、で？どうする？」

この質問の答えはアイツが現れたときから決まってる。

「もちろん“横”でしょ！」

「・・・しゃーない！“上”行つたろう！！」

「わお、おっとこまえ〜」

「しいに言われると嫌味にしか聞こえへん」

「えゝ本心なのにいゝ」

「はいはい」

むう・・・麟は何でもかんでも卑屈に受け取りすぎなんだよっ！
なんだかんだ言つて麟のことは頼りにしているし尊敬もしてる。
いつつも辛い事ばっか引き受けてくれて、おかげでボクは楽しんでいる。

「しい！！ばおつとしてないでさっさとやるで！！」

おつとお怒られちつたー。さて、行動を起こすかね。
その瞬間、僕は示し合わせたように同時に動いた。
ボクは街の出口のほうへ、麟はなるべく高い所・・・街の中心へ駆け出した。

ボク等は此処に来る前、よくゲームで遊んでいた。
プレイヤーが協力して敵を倒すタイプのRPGだ。

“横”は術者を、“上”は本体を。

それはボク等の中でできた暗黙の了解だ。

中ボスの場合は“横”が操っているヤツの事で“上”は中ボスの弱点を狙うという事だ。

しかし、中ボスの場合はどちらか一方しかないので両方に行くのは

今回が初めてだ。

今回はどっちのパターンか分らないのでどっちも行く、という事にしたのだ。

さて、と・・・

走りながらボクは考える。

操っているヤツがいるとすればたぶん外だろう。

街の中にいたらひとたまりも無いからなあ・・・

なるべく安全な所・・・あ！あの崖の上！！

あそこなら“中ボス”の動きも見えろし安全だ。

そう思つて目的地を決めた時、ボクはあることを思い出した。

「やっぱあ・・・ヴィラ置いてきちゃった・・・」

E p i s o d e ? ? 「中ボス、零の場合」(前書き)

水曜に更新できませんでした・・・
ただそれだけが無念で・・・
↑

どうしよう・・・ヴィラ置いてきちゃった・・・
うーん・・・

ボクは立ち止まって30秒間考えた後、気にしないことにした。
ヴィラなら大丈夫でしょ。たぶん。

そう思っただけはまた瓦礫の中を走りだす。
正直言っただけ結構危なくなってきたぞ？大きい破片が落ちてくるよう
になって・・・と

落ちてきたブロックをサイドステップで避ける。

ホントに危ないなあ・・・どんな破壊力持ってるんだアイツは。

「・・・ん？」

瓦礫から目を離し、前を見ると人影が。
多分ここの住人だろう。無視、無視。

そう決め込んで黙ってその人の横を通りすぎようとすると、

ガアッ

は？

後ろに引つ張られた気がして腕を見るとそこにはボクの腕をがつし
りつかんだ手が。

で、視線を上に向けると見知りらぬおじさんの顔が！！

「ぎゃああッ!!」

「グフウツツ!!」

しまった・・思わずやってしまった・・

「な、何をするんだ!!普通見ず知らずの人に回し蹴りを顔面に食らわせたりはしないだろう!？」

「ひッ!!」

こ、こわい・・

いろいろと癖で反射的に回し蹴りをしちゃっただけなのに・・

「ボ、ボクは無実デス!それでワ!!」

そっいつて僕は回れ右をしてダツシュ・・ッ!!

「ちょ、ちょ、ちよつと待たんかいッ!!」

・・ダツシュできませんでした・・

ボクが逃げ・・この国の人のために走り出そうとしたとき
おっさんとはつさにボクのスカートの裾をつかんだのだ!ほぼ変態
である。

アレ???完璧変態??

「こんのオツ!」

「ちょーッ!!ま、ま、待って!!すまん!!ちよつと待って!!」

ふひゃッ!!顔!!怖ッ!!

思わずまた蹴りそうになった足をおっさんの恐怖から止める。

「ッ！ー！うわぁ！？」

が、不自然な状態で止めたため勢いあまって転んでしまった。

「いてて・・・」

ボクとした事が、尻餅をついてしまった。

「あ、だ、大丈夫かい？」

変態おっさんがボクに同情が哀れみの目を向けながら手を差し伸べる。

なんていう事だろう！！最悪だ！！

変態なおっさんまでに同情された！？元はといえばおっさんのせいなのに！！

唯一の救いはこの場に麟がいない事だが・・・

いたらボクは死ねるぞ？恥ずか死ぬぞ！？あー！絶望だあ！！

「お、お嬢ちゃん？あのーちよいと聞きたいことがあるんだが・・・」

「・・・はい、なんででしょう」

このおっさんは思ったより変なヤツだった。

この状況で質問か。しかも尻餅ついてる人に？

「あ、あ、あの怪物はなんなんですか・・・！！」

・・・あーわすれてた。

このおっさんに出会ったせいですっかり忘れてしまっていた。

ん？忘れてた？？

「あッ！！行かなきゃ！！！」

忘れてた！！早く行かないと隣がやばい・・・かも？

まあいいや！そう思つてすぐに立ちまた走り出す・・・そうとしたのだが、

「・・・」

いいかげん3回目は驚かないし予想もしてたけど・・・
例に漏れずおっさんはボクの腕をしっかりと捕まえていた。

「君！どこ行くんだよ！？アレは何だ！？何が起こっているんだ！？」

おっさんのパニックした顔は目も当てられない。見るもんじゃない。

「まさか一人で逃げる気じゃ——」

「煩いなア！！！」

「ぐほおあッ！！！！！！！」

今度は反射ではなく、本気の力で、力いっぱい顔面に蹴りを入れてやった。

「周りを見る！！皆避難してんだよ！！いつまでも一人が残つてんじゃねえや！！」

一人が残つて他人に迷惑かけんなやボケがあッ！！！」

「ひいッ．．！！」

ハア．．ハア．．

こんなヤツに少しでも時間をくれてやったボクが馬鹿だった。
行かなきゃならないのに．．

これ以上ここに居るのは時間の無駄だと判断し、足を動かす。
さつきよりももっと速く、走らないと．．！！

視界の端っこに捨てられた子犬のような目をした

気持ち悪いおっさんが見えた気がしたが気のせいだと言う事にして
おく。

あんなもの覚えていたらトラウマになってしまう。

ホント、何であんなおっさんにかまってしまったのだろう。

自分の余計な好奇心がこれほどまでにウザイのは初めてだ。

本当に．．腹が立つ．．！！

「クソお．．ッ！！」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

街の外に出てみると崖の上まで上れる梯子が掛けてあった。

恐らくダンディおじさんとその愉快的仲間達が立てかけたものだろ
う、ボク等のために。

ふうん．．

ま、とりあえずは役に立ったじゃん。よかったね、おじさん。

ありがとうとは言わない所が我ながら意地が悪いとは思ってたがまあ

いいだろう。

梯子を駆け足でのぼって周りを見渡す。それらしい人影は見えないんだけどなあ。

とりあえず一周してみるか。

さて、右か左か・・・

操っているヤツが居るのなるべく近いほうを選ばないとならない。

右か左か・・・右か左か・・・

「とりあえず右ッ!!」

迷っている暇など無い。

そんなのさっきのおっさんにくれてしまった。というかとられてしまった。

近いほうだったらしいなあー

『ギャグリアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

遠くに“中ボス”の鳴き声を聞きながら

今はもう殆どやけくそ状態になっている自分をただ、知らん振りをするしかなかった。

□ ■ □ □ ■ □ ■ □ □ ■

しかし・・・前に隣にも言われたけど・・・

ボクの勘って当たるんだなあ・・・

いま、ボクの目の前にはなにやら怪しい魔方阵っぽいものを駆使してあの“中ボス”を操っているらしき人がいる。

まあ目の前といってもボクは茂みに隠れて様子を伺っているから30メートルくらい離れているからすぐ近くと言っわけではないのだが。

アレ??何で隠れてるんだ??隠れる理由なんか・・・
そこまで考えて思考を止める。考える必要など無いのだ。
今はただ、身体を動かすことだけを考えればいい。

地面を力いっばい蹴ってソイツの近くまで行って・・・

「とおうッ!!」

とび蹴りを食らわす。

『ッだあぁっ!!??』

ズザアアッつといい音を立てながらソイツは倒れ・・・地面にひれ伏した。

へえ、こいつも【災いを呼ぶもの】ってヤツらしい。
同族を操るねえ・・・趣味が悪い。

『だ、誰だてめエはッ!!』

「ダメだねえそんなんじゃ。いきなり蹴られたらまず“何するんだあ!!”でしょ」

お?何か悩んでる。

『え、えと、なにするんだあ・・・!』

まさか本当に言うとは。初めての対応だよそれ。
でもねえ、だめだよ。あまあまだよお?

「わかんない?とび蹴りしたんだよ。この鈍感野郎」

『なッ!』

口をパクパクさせるな、うっとおしい。

「オイあんた。あの怪物バケモンの止め方してんでしょ?やれ」

『は、ハッ!馬鹿にするなよ??誰が言う事き——
「だまれ」

『グハッ!—!』

「お前に選択肢は無い。今すぐあいつを止める。さもなくばアンタの息の根を止める」

『やつ、やれるモンならやってみるオ!—!』

「・・・しかたない、か」

残念ながらボクは今、メチャクチャイラついている。
実行犯とやらだと話している余裕は無いのだ。

『グハッ!—!』

黙って攻撃する。

『ぐああ!!!!』

ためらいなどいらない。

『がああ!!!!!!』

ただ、黙って攻撃する。

『グフッ』

『ごああ!!』

『ガァッ!!!!』

『ぐほおっ』

お前らは、ボクを、イラつかせすぎた。

ムカつんだよ。

イラつくんだよ。

何でそうやって・・・いつもいつも・・・!!

「さっさと浄化とやらをしろや、くそがァッ!!」

「パッァン!!」

だんだん、ぼこぼこになったソイツが透けていくのが分った。

前のヤツもこうやって消えたのだ。なんだ、やろうと思ってても出来るじゃん。

『つく・・・!!小娘ごときに私がやられるとはな・・・』

「あ？」

『だが残念だったな、もうアイツは止められん』

何のこと・・・？？

『アイツは私が死ぬと勝手に動くよう仕組まれている、もう誰もアイツを止められん』

・・・ッ！！

「どういうことだよ、それ！！」

『今更気づいても遅い、はっはっは！嘆くがいい、己がしたことお
おッ！！』

そこまで言って、そいつは消えたのだった。

しいと分かれてから少したった後、俺はある事を思い出していた。

「ああ！！ヴィラにおいて放置してきてしもうた！！」

・・・まー何とかなるやろ。

そう考えて走る事に専念する。

街ん中は瓦礫とか落ちてきて危ないんやけどなあ・・・

しかし、引き受けてしもうたからにはやるだけやるけど
あないな大きいもんどないせえっちゅうや・・・

と、心ではブチブチと愚痴りながらも足を動かしている自分は何なんだ、と時々思う。

もしかしたらこれはもう病気の域かもしれない。

だとしたら何の病気だろうか、奴隷病??

ああ！ダメだ！！一人やと変なことばっか考えてまう！！
思考停止！身体を動かせ黒峰麟！

・・・弱点といえばまあ首もとやろなあ、それか足の裏とかやな。
ただの人間な俺には後者の場合諦めるしかないんやけど
前者の場合やったら高い所から遠距離武器なんかつこうて
攻撃すりゃあ何とかなるやろ。

そう思つてとりあえずなるべく高い建物なんかを探す。

・・・やっぱ、アレかなあ

街の中心に立てられたおとぎ話にでも出てきそうな立派なお城。
あの鐘のところにのばれば丁度“中ボス”の頭までありそうだ。
いずれにせよ、ほんま危ないわあ・・・

あそこまで行くのも一苦労しそうやしなあゝ

と、思いつつも落ちてくる瓦礫を避けながら着々と進んでいける現状。

意外と俺は凄いのかも知れへん！

・言つてて馬鹿らしくなってきたわ。しいがいたら確実にバカにされそうや。

「つとお」

いつの間にか城の前に来ていたらしい、危うく門にぶつかることだった。

いやあしつかし、

「でつかいなあ・・・」

ええなあ、金持ちは。

もしかしてこの国の王様の家と言っんやないやろな？

「・・・」

よし、進入成功。

らくらく越えられるもんっちゅう奴ほど意味を成して無い門はあらへんなあ

不法侵入？？犯罪？？

知るかそんなもん。この世界に警察がおりとも思えんしな。この国の危機や、少しくらい目つぶってくれるやろ。

そのまま城の中へ窓からさらに侵入し上へ行く階段をのぼる。だいぶ上がって息も切れてきたところで丁度階段が終わる。

「へえ・・・」

外に出ると吊り下げられた立派な鐘が目に入った。

これは・・・まさか黄金？？

これ、全体でいくらかかっているんやろうなあ・・・？
なんて、呑気な事を考えていると

『グゴアアアッ！！！！』

「ッ！！」

地面が大きく揺れる。

“中ボス”がこっちに向かってくるのが見えた。

チッ！ついてへんわぁ・・・何でよりにもよってこっちに？？

考えても分るわけがないのにどうしてこつても重要な時に頭がまわらないんや！

集中せな！！

あいつはこっちに向かってきていると言う事は考えようにもよつては幸運だ。

弱点なんてものが仮にあるとすれば遠目から見えるところにはおかないだろう。

そして弱点なんておいてくれているのならしつかりと見ればコレと分るようになっていたのだろう。いや、こればかりは俺の願望でしかないんやけど。

そうこうしているうちにも“中ボス”は確実に隣のほうへ向かってくる。

図体デカイクセして意外にはえー・・・

「・・・あ」

“中ボス”の意外な速さに見とれているとふと変なものが目に入っ
た。

「いや、まさかねえ??」

“中ボス”の丁度眉間の辺り、なんていったら分らないが
ウルトラマンの時間がきたら点滅する胸のアレみたいなのがついて
いた。

おまけになんか脆そう。

なんかの棒で一突きすれば割れてしまいそうな感じだ。

「やー・・・まさかなあ??」

・・・あからさまに弱点です、みたいなカンジや。

うーん、やってみる価値は・・・あるかな?

岩でも投げてやるか、とりあえず。

“中ボス”が暴れまわったせいで建物が少し崩れていたから岩なら
いくらかもある。

よつ、と足元に落ちていた頭の半分くらいはありそうな岩を持ち上げ
的確に狙いを定め、投げた。

まだ“中ボス”とは何十メートルか離れているが

岩はそんな距離などまったくもって問題ないというように
まっすぐ弱点らしきものに向かって、ものすごいスピードで飛んで
いった。

「ガンッ」

「ヤバイヤバイヤバイッ！！」

こんなお城じゃ“中ボス”が近寄ってきただけでも崩れてしまいそうだ。

何とかせなあかん！生き埋めで死ぬんはイヤやぞ！？

どうする？ここから飛び降り・れるわけないわな。しいじやあるまいし。

もどらな！

そうおもって振り返った時、地面が大きく揺れた。

「うおっ！あぶねッ！」

地面が傾く。天井につるしてあった鐘が大きく揺れて少し鳴った。“中ボス”のほうを見るとすぐそこまで来ていることが分った。

「・・・めんどくせー」

進むとしたら前しかない。

下におりる階段はつぶれてしまっていた。

あいつを・・・倒す？

ムリやろー、あんな巨体。

こんな状況なのにも関わらずもしかしたらいつもより冷静かも知れない自分がいることに

内心驚きつつもとりあえず死を覚悟してみる。

「“中ボス”ぜったいスピード違反や。」

などとよく分らない事を眩き、近くに落ちていた鉄骨に手を伸ばす。

「・・・頑張ってみましょか」

手にした鉄骨を握り締め、麟は“中ボス”を睨みつけた。

なにやら凄い音を立てて天井が崩れる。

もう十分ももたないかもしれない。

麟の頭の上にもパラパラと破片が落ちてくる。

だが彼はそんなことは全くもって気にならないかのようにまっすぐ前を向いていた。

もう、ちよつと・・・

床の揺れがより激しくなり

しつかり踏ん張っていないと立っていらなくなる。

建物はほぼ半壊状態。外から塔の中が見えるようになってしまっていた。

“中ボス”があと数十メートルも無いところまで来ているからだ。

——来い！！

十メートルをきつたくらいの時、麟は一步踏み出した。

体重をかけた所から床がぬけはじめる。床が落ちる前に前へと進む。

麟は“中ボス”にむかって走り出していた。

「けす・・・！」

もうすこし！！

徐々に加速していく。

事態が急変する。

「・・・『ア?』?」

急に“中ボス”が叫ぶのをやめ、きよろきよると周りを見渡し始めたのだ。

『アアア??』

・・・な、なにが・・・?

——ッ!!

「ちゃあーんす」

どこかで聞いた事のあるような声を出すと同時に
いまだに挙動不審な“中ボス”に向かって麟は走り出した。

そして、床が途切れた所で力いっぱい床を、ける。

「うおおッ・・・!!」

雫とは違い、上へと飛ぶようなジャンプ。

「んのおつとお・・・」

そして、着地する。

『グア??.』

動かんといてえな？

麟が心の中で話しかける。もちろん相手に伝わる事は無いのだが。麟は今、“中ボス”の頭の上にいた。

なぜかは知らないが“中ボス”の行動がいきなり変わり、先ほどよりも随分隙ができたのだ。

おまけに触覚も鈍っているようやしなあ・・・

よっ、と言いながら“中ボス”の眉間近くまで移動する。状況が把握できていないようで大して動いてもいないので移動は楽なのだ。

そして、ウルトラマンの胸にあるやつっぽい俺的“弱点”のところへ手に握っていた鉄骨を持っていき、

「きえろや、怪物」
バケモノ

突き刺した。

E p i s o d e ? ? 「終局、のち合流」(前書き)

夏休みが終わりますね

ストックがなくなっちゃいましたんで ↑少ない

また投稿が遅くなると思います。

でも気にしないでください ↑

Episode ??

「終局、のち合流」

ちわ、
麿麟
です。

みなさん突然ですか俺は今、何をしてると思います？

正解は

「うおおおおお——！！！！！！！！！！」

落下です。

ヤバイヤバイヤバイ！！

まさかホントに消える事までは予想しとらんかった！！消えるというかたぶん浄化つてヤツなんやろうけど・・・怪物っちゅうたら普通なんか残るもんちゃうの！？

死体とかあさつてうまく剥ぎ取ったりするもんやないのー！？

この高さから落ちたら絶対死ぬて!! 今絶対落下中なんやけども!

くそツ・・！

国を守ったヒーローにこんな仕打ちかよ！

よく考えてみれば自分はヒーローなどという性分ではないことに気が付き

麟はあきらめ目をつぶった。

こんな事なら、ナンバープレート覚えとけばよかった――

「ツんぐ!？」

自分でもよく分らない考えが頭を横切った時、麟を衝撃が襲った。しかし、硬い地面に身体をぶつけた衝撃じゃない。

・ なんかの布か？

「おーう、大丈夫かい？少年」

麟が自分を襲った衝撃の正体を推測していると頭上から脳天気そうなおっさんの声がした。

「はっはっは！不思議な子供たちだとは思っていたが、すごい事をやってくれるねえ」

「・・・？」

麟が顔を上げると俺を包んでいた布の間からあのダンディおじさんの顔があつた。

「おじさん・・・なんで・・・」

何でここに居るのか、そう言いかけたとき今度は横からの衝撃がきた。

「うおっ！？」

「リン！！！！」

麟はよろめきながらも今度はその衝撃の正体はすぐに分つた。

「心配かけさせおつてえ！！なにをしていたのじゃあー！！」

「・・・ヴィラ」

男のクセに女の子のように泣きながら抱きついてくる。

しかしその容姿も女の子そのもののようで嫌な気は全然しないのだが。

「うー！リンのばかぁー！あやまれえー！」

・・・女の子以前に幼稚園児のようだ・

ボロボロと涙を流しながら叩いてくる。しかし、

行動だけ見れば小学一年生くらいの女の子と見られてもおかしくは無いのだが

ヴィラは男だ。男に叩かれれば小さかろうと細かろうと痛いものは痛い。

麟は苦い顔をしながらヴィラと向き合う。

「置いていってゴメン」

麟はまっすぐヴィラの目をみながら言った。

するとヴィラは一瞬驚いた顔になり、そして麟を睨みつけながら口を開いた。

「・・・忘れていったじゃろ」

「う」

“う”ってなんじゃ“う”って！！凶星か！？凶星なのか！？」

やベッ！まっずった！！

「わ、悪かったって！！それにちゃんと思い出したから！！」

「一度は忘れたんじやろうが！！許さんぞ？絶対許さんぞ！？」

ヴィラがいつになく怖ろしい形相で迫ってくる。

俺は後ずさりしながら言い訳するがウイルスは殆ど聞いていない。

「仕方ないやろ！？メツチャ急いでたんやってー！！」

「それは理由にならんじやろうが！！言い訳するでない！！」

くっ！なかなか手強いやん・・

「リン。この恨みきつちり晴らさせてもらうぞ・・？」

・・怖さで言ったらしいといい勝負やで、ウイルス。

こんなときは・・！！

「あッ！逃げるなリン！！」

ダッシュ！！

逃げるなと言われて素直に聞き入れる麟さんではないわ！！

「はっはっは！元気な子供たちだなあ！」

「またんかリン！！」

ケラケラとおじさんが笑う声とウイルスの怒った声を聞きながら

“中ボス”の時とは違った意味で全速力で走る。

ああ、明日は筋肉痛地獄やな・・

麟さんはどっちかつちゅうと頭脳派なんやで！？

肉体労働ばっか強いてしいもウイルスも苛めかいな！！

大体いつもこいつもありがたみと言うものを少しは感じたらええんちゃうか！？

「麟」

しいのケースはいつもや。

怖がりで一人だと何もできんクセして俺の前だとメチャクチャ強気やし。

「麟」

つーか絶対他の人と俺の扱いちゃうやん。

俺に対してだけなんかひどい！

やけに暴力的になるし、言葉遣いは悪いし、奴隷のように扱うし。

「・・・麟」

なんか泣けてきた・・・なんなん今までの扱い！

よう考えてみれば理不尽なもんばっかやったんちゃうか！？

遭ったび殴られたし、体育会系の男子友達かつ、ちゅうねん！

「・・・麟？」

そういやしいの戸籍見たことなかったけど実は男なんちゃうか？

せやったらあんないちいち暴力的なんも解るわ。

今度会ったら性別偽ってるやろって言ってやるか、ハハハ！！

「ようし、齒を食いしばれよ麟」

「ッだあアア！！ちよいまてしい！！冗談や冗談！！」

後ろから嫌な空気爆発の言葉が聞こえたので急いで振り返ると案の定そこには雫の姿があった。

「アホだね、冗談じゃなかったら土に還ってもらってるところだよ」

「冗談やって分かって殴る気やったんか！？」

「それか蹴るかだけどどっちがいい？」

「どっちも良うないわ！！」

しいはホンマおそろしい・・・

いつも見張られてる気いして気が抜けへん。

「・・・てかなんで俺の考えてる事わかってんねん」

「隣に聞かれないんですけど」

「・・・？」

なんのことや？

何で俺に聞かれないんやろ。

「・・・いつもは無意識ですか」

「なんのこと？」

「なんツでもない！そんなことより、アイツどうなったんだよ！」

・・・アイツ？

アイツって誰や？

「“中ボス”」

「ああーそんなヤツおつたなあ！」

「何で忘れんだよこんな短期間で！！」

「ははは。なにぶん忘れっぽいんで」

「で？どーしたのさ？」

スルーかいな。

「ちゃーんと消しましたあー」

てか消えました。

「ふうーん。鱗が？」

「俺以外に誰がおんねん」

「さっきの変態おっさんとか・・・？」

「誰やねんそれ！！さっきっていつや！？」

「まーまー堅いこと言わないで」

・・・堅いことか？

そんな俺の疑問は知らないと言う風にしいはにこりと笑う。

「終わったんだったらいいや、ヴィラのところ行こ！」

「え、ヴィラのところは・・・」

「なに？なんか問題でもあるの？」

「や、そーいうわけや・・・」

「じゃー行こ！」

俺の心の中の葛藤も知らずにしいは俺の手をぐんぐん引っ張っていく。

せや、終わったんや。

もうあんな怪物はおらんや。

そんな少しの安心がこのあとのヴィラの手によって起こされる惨劇を生むとも知らずに・・・

Episode ??

「終局、のち合流」(後書き)

「高い所から女の子が落ちてきたのを受け止めるのってどうかで見たことあるけどアレってどちらも骨折くらいはするよね、普通」

この話のサブタイトル候補だったやつです。

直前になって止めましたけどね、さすがに長すぎですよネ・・・

E p i s o d e ? ? 「出発点」(前書き)

昨日投稿したと思ってたんです！

今見てみたら出来てないじゃないですか。

↑しらねえよ

何でやねん！！　みたいな。

水曜投稿できなかった・・・

「ふわぁ・・・」

今は昼。

昨日は久しぶりに頑張ったから体が疲れていたのかこの時間までぐっすりと眠ってしまった。

昨日同様部屋を出てロビーっぽい所に向かう。

「お？」

ヴィラはいるけど・・・麟がない。

「ヴィラ、おはよー」

ヴィラに声を掛けるとパツと振り向いていつものように微笑む。

「おおシィ。もう昼じゃよ？」

その返事は少し不満だけどとりあえずほっとく。

「わかってるもん。それより麟は？」

「まだ眠っているようじゃ。よほど疲れたんじやろっ」

ふーん・・・確かに昨日はいろいろな意味で大変だったからね。いろいろな意味で・・・

「ん？なんじゃシィ、私の顔に何かついておるか？」

「っえ！な、なんでもないっす、よ？」

ヴィラの黒い笑顔が・・・

「ふふふふー？なあにを考えているのじゃー？」

「なんでもないったらー！！もー！」

ボクが逃げるとヴィラは黒い笑顔を顔に貼り付けてニヤニヤしながら追ってくる。

コレはなかなかトラウマになりそう・・・

「・・・なに2人でじゃれてんねん」

「「ッ！？」」

突然の声にビックリしながら後ろを振り返るとまだ眠そうに目をこすりながらボク等を呆れ顔で見ている麟がいた。

「おー麟！いい所に来た！」

そういつてさつと麟に後ろに逃げる。

ホントいいタイミングで来てくれたよー！

いつかうま。棒奢ってあげよっ！

「チツ・・・おそようリン」

ヴィラは明らかに不機嫌そうな顔で麟に挨拶する。
確実に麟に非は無い。やつあたりだ。

「・・・な、なんでそんな不機嫌なん？？俺もう一回寝てこようか？

「？」

麟は訳がわからず困っているようだ。ただど戻られちゃこっちが困る。

「何で起きたのにまた戻るんだよっ！変なやつだな」

「や、でもヴィラは俺にいてほしくないような顔してるんやけど」

「そっ、そんなこと無いぞ！！なにを言っておるのじゃ！！」

「あーそーですねーハイハイ」

麟は確実にめんどくさそうにしながらテキトウにヴィラに相槌を打つ。

ヴィラはそれにむかつて反論するが麟はまったく聞いていない様子だった。

「で、これからどうすんねん」

「へ？」

「・・・この街にもう用はないやろ？せやから次はどこに行くんや、って話」

「ああ、そのことか。そのことなんじゃが・・・」

ヴィラが何かを言いかけたその時、

「も、もうすこ・・・し、この国・・・に居ては・・・い、いかなかな・・・？」

息絶え絶えのダンディおじさんの声がした。

「「「「・・・」」」」

「そ、そんな目で見るな！久しぶりに走ったからつ、疲れただけだぞ！？」

「・・・分ってますってー何考えてると思ったんですかー？」

そういいながら雫はアハハ、ときこちなく笑う。

ダンディおじさんはそれに少しの不安を覚えたがとりあえず気にしないことにした。

「君たちはこの国を救ってくれた。国王も御礼をしたいと言っている。だからもう少しこの国にとどまっていかがかね？もちろんできる限りの最高の御持て成しをするつもりだ」

ダンディおじさんはにつこり笑いながら「最高の御持て成し」の例をいくつか挙げてみせる。

「・・・ヴィラ？」

どうするのかを聞くためにヴィラのほうをみる。

「ニク・・・が・・・も・・・タイ・・・コメ・・・」

どうやらヴィラは“豪華な料理”に惹かれたそうだ。

ダンディおじさん曰く

「近隣で取れる食材の中でも最高級のものだけを集めた赤字決定フルコースだ」そうだ。

この世界に“赤字”と言うものが存在するのが気になるね。

「ヴィラ！」

「ッあ！はい！え、なんじゃ！？」

この慌てっぷり・・・ちゃんと話を聞きなよね・・・

「ここに留まるか否か、や」

「ああ、その事なんじゃが実はこれから急いでアルフエームと言う国に行かねばならないのじゃ」

「「え？」」

「そうか・・・それは残念だが、引き止める権利を我々は持たない」

「ご好意はとても嬉しいのじゃが・・・やる事があつて・・・」

「「は、」」

「ああ。君が気に病むことは無い。だがせめてあと一日くらいは居てくれないか？今晚だけでも御持て成しさせてはくれないか」

「えっ・・・に、にく？」

「肉に釣られるなよッ！！！」

「「ッ」」

隣のつつこみに今まで大人っぽく話していた2人がビクつく。それを見るとなんだかい気分になった。ホント不思議！。

「ヴィラさん肉に釣られる所は男の子っぽいけどねー」

「食い物につれるんはカツコ悪いで？」

「う・・・こ、コレは釣られたんではない！ただちょっと興味があるだけ・・・」

「では留まってくれね！？」

「えっ！そ、そうなのか・・・？」

「「ヴィラ！！！」」

「ッ!!す、すまん・・・」

「謝らなくてもいいけどやることがあるなら寄り道なんてしないでね」

「てゆうかやることってなんや?」

「・・・それはあとで、じゃ」

ヴィラそういつて口の前に人差し指を立てる。「シー」の格好だ。

「ふーん」

それを見た麟は何かを納得したような声を出し、コホン、と咳払いをした。

「と、いう訳やからディナーには付き合えそうも無いわ。おじさん」
「エッ」

「そうか、わかった。何をしようとしているのかは知らないが頑張れよ、お嬢さん方!」
「え・・・」

3人中2人は“お嬢さん”じゃないんだけどなあ・・・

「ヴィラ、ご飯くらい諦めろ」

「うう・・・」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「ギイイイ・・・」

セルリアン王国の正門がいかにも古そうな音を立てながら開く。
その扉を開いている人に聞いたら

見た目のわりには脆くて本当に攻められたらひとたまりも無い、ただの見掛け倒し。

な、扉なんだそうだ。だが、

「・・・」

扉の先にあるのは当然崖なのだが。

「これじゃ扉はいらへんなあ」

たしかに。

「じゃあ、開門ご苦労さまつしたー！」

麟が門を開けていた若者、村人A・・・本名は知らないからあだ名ね、村人Aに声をかける。

「はい、では御気をつけて」

「おう！」

麟が返事をして、セルリアン王国をあとにする。

崖にはやはり梯子が立てかけてあった。

もう一つの出入り口にも立てかけてあったけど、ちゃんと見るとかなり不安定だ・・・

昨日は急いでたからそこまで考えなかったけど

こんな梯子を駆け足で上るなんて、だいぶ危ないことしてたんだなあボクって。

「おさきどーぞ」

梯子を見上げていると麟がボクに声を掛けた。

「レディファースト、やから」

都合のいい時だけ・・・！

そもそも麟は本当にボクのことをレディとしてみているのか、いや、絶対見てないね！嫌味だろ、それ！

「なんや？怖いんか？」

ボクが黙って睨んでいると麟がニヤニヤしながら口を開いた。

そんなわけ無いじゃん！！既に一度のぼったんだよ！？
って、言い返したいんだけど

そんなの口だけでしょ、って言い返されるに決まってる。

「俺そないガキやあらへんで？」

・・・決まってるんだよ！五月蠅いなあ！

「もー！！」

「????」

半分ヤケになりながら梯子をのぼる。

ヴィラは何がなんだか分らない様子。

ヴィラには読心術みたいなく分らない特技は無いようだ。

まあその方がいいんだけどさ。

崖の上にのぼるとセルリアン王国が見渡せた。
来た時見えていた街の中心にあった大きな鐘のついた塔はなかったし
立派なお城はボロボロになっていたけれど、
街の人たちが働く姿は変わりなく、昨日あんな事があったなんて嘘
のよう。

「よつと・・・」

最後に麟がのぼって来て、もういちど街を見渡す。

「結局2日くらいしかおらへんかったなア」

「そーだよ！メツチャ頑張って来たのに！」

「わ、我は別にあと一日くらい居ても・・・」

「俺は肉なんかよりもヴィラの“やる事”のほうに気になるんやけど？」

「あ、ボクも気になってたんだよねー」

「あー・・・そのことか」

では、とりあえず歩きながら説明するかの。
ヴィラはそういつて歩き出した

Episode ??

「壁の向こうの異変？」

「前に壁の向こうの【守神】様の話はしたじゃろっ？」

ヴィラが前を見たまま後ろに居る麟と雫に聞いた。

「う、うん、聞いたよ、うなあー……忘れたような」

「？、なにか言ったか？」

ボクが最後に言った言葉が聞き取れなかったらしく
前を歩いていたヴィラがパツと振り返る。

「な、なんでもないッ」

な、なんだっけ！？

ボクが記憶の中を必死に探っていると麟が、あー、と言いながら口を開いた。

「あれやろ？怠け者の神様」

「怠けッ……！？」

「“仮にも神様なのだから怠け者呼ばわりはやめろ”とでも言いたいんかー？ヴィラが言ってたことやぞー？」

麟の答えを聞いてまたまたパツと振り返った

ヴィラのビクリ驚き、の声と顔がムカついたらしい麟は
露骨に不満を前に出しながら言い返す。こいつやっぱ子供じゃん。

「べ、別に我はそんなこと一言も言っておらん！」

そっぴいなからブイとまたまた前を向くヴィラ。
そんなに首振つてると頭痛くなっちゃうよ？

「で、そのなま・・・」

今怠け者っていおうとしたね、ヴィラ。

「ゴホン。で、その【守神】様が、あー、すこし、仕事を怠けたりされるのじゃ」

ごまかしたね？絶対無かったことにしたね？

「まあ、これは前にも言ったことなのじゃが・・・」

ヴィラはそこで一旦話すのをやめ、

少しいいにくそうな顔をしながら再び口を開いた。

「しかし、最近少し様子がおかしいのじゃ」

「おかしい？」

「おかしいって、どんな風に？」

「ここ一ひい月つきぐらい【災いと呼ぶもの】が多く現れるようになったのじゃ」

多く？ってどういうこと？？

「我等はここ最近すでに2人の【災いと呼ぶもの】に出会っておるな？」

「2人じゃなくて3人だよー」

「あの怪物を人としてカウントするならやけどな」
モンスター
「で、その2人と1匹なのじゃが・・・」

うん。と、雫と麟が同時にうなずく。

「普段、【災いを呼ぶもの】に会うことなどほとんど無いのじゃ」
うん？と、雫と麟が同時に首をかしげた。

「普通に暮らしていれば会う機会など無い存在、ということじゃ」
ボク等は一週間もたたないうちに3・・・2人と1匹に出会った。
確かにそれはおかしい。

「あ、よう考えてみれば、みんなが俺等ぐらい頻繁に出会ってたら
“人々に秘密”とか無理やんなア」

「そうじゃ。奴等に一生に一度でも出会うことが出来たならばそれはもう奇跡と言っても良いぐらいだったのじゃ」

だった。つまり、今は違うという事。これがヴィラの言う“気になる事”か。

「アルフエームと言う国はじつは我の故郷なのじゃ。前、我の一族は【聖なる使者】と呼ばれておるといったじゃろう？」

「あッ！その【聖なる使者】が沢山いる所に行けば何か分るかもしれない？」

「そういうことじゃ。まあ【守神】様の様子も知りたいし・・・」
「ふーん？」

「で、そこにはいつ着くの？」

少しの静寂が訪れる。

前を見、目を凝らしても見えるのは地平線ばかり。

見渡す限り青々と茂る草原と道っぽい少し草が剥げ、地面があらわになった部分しかない。

「あー・・・大丈夫じゃ。野宿の道具は持っておる！」

・・・まし？

「どんだけ離れてんのや！思い立ってすぐ行ける場所やなくないか！？」

「そ、そんなことはないぞ？途中小さな村も幾つか在るからちゃんと休めるし・・・」

「村がいくつか入るくらい遠いの！？馬車とか無いわけ？？」

「う、煩いうるさい！さっさと歩くぞ！」

そういつてヴィラはすたすたと先へ行ってしまった。

ふう。ボク歩くのキライなんだけどなあ・・・

「ま、しかたないやろ？」

「むー・・・そうだけどお」

「さっ、はよ行こー！」

そういつて麟も先に行ってしまう。

女の子を置いて行くななんてひどい奴等！

・・・

もー！！

「こらー！！置いてくなあー！！」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「いやあゝ、一日でここまで来れるとは思わなかったぞ？」

「俺も・・・ここまでいいが頑張るとは思わなかったわ・・・」

「ボ、ボクは別にツ・・・！麟なんかに負けたくなかっただけ・・・」

ボク等は今、名前も無さそうな小さな村の宿に居る。

ちなみに宿って言うのはどの村にあるわけじゃないらしい。

ここに着くまでこのこと同じくらいの大きさの村で一回休んだけどそこには宿が無かったからね。

町の人に聞いたらセルリアンからアルフェイムに向かう途中の旅人が最近多く立ち寄る様になって来たらしくてこの際だからと宿を造ったらしい。

この村の中では村長さんの家よりも大きくてなかなか良いところだ

けど

やっぱり村の中ですごく目立ってて入る時めちやくちゃ見られてたね。

「つーかーれーたー・・・」

・まあ、見られてたつてのは本当はそのあと麟から聞いたことなんだけどね。

もともと短距離向きであまり体力の無いボクはそんなこと気にする余裕も無かったもん。

「あとどの位行けばアルフエームってところに着くんや？」

みんなで部屋の真ん中にあるソファでまどろんでいると麟が唐突にヴィラへ質問した。

「ん？ああ、もしかしたら明日にでも着くかも知れんぞ——」

「まじッ！？やったあゝ！！あと一日頑張ればあとはゆっくり休めるうゝ」

「——今日よりもう少し速く歩いたらじゃがな」

「ツツえー！！！！！！！！！！」

死んじゃう！死んじゃう！！

もー既に明日筋肉痛だよ！？ムリムリムリムリムリムリムリムリムリ！！

うん！ムリは禁物だよな！明日はゆっくり進もうか！妙な闘争心は捨ててさ！

「おやすみ！ヴィラ！」

今まで寝転んでいたソファからバツと起き上がりベッドへ向かう。

「えっ？あ、お、御休み・・・？」

「ホンマ、唐突なヤツ・・・」

なんか言ってる麟は無視する。

僕は誰がなんと言おうと明日はゆっくり歩いて3日くらいかけて・・・
その・・・

「アルフエーム」

そう！アルフエームに行くんだから！

「ッていうか心を読むな！」

「・・・一人でなにいつてんねん、しい・・・」

「え？」

いま麟心読んだでしょ？

そう目で問いかけても麟は頭を傾げるばかりで。

ま、いつか。疲れてるんだよ。寝よ寝よ。

そう考えて、ボクは夢の世界へと堕ちた・・・

E p i s o d e ? ?

「故郷と、誰？」

「いったあ！！」

ゴンツという痛々しい音とともに森中に叫び声が響いた。

「またかいな・・・ええ加減にせえよしい。コレで何回目や？」

前を歩いていた麟が呆れ顔で振り返る。

「う、五月蠅いなあ・・・ボクだって好きで頭ぶつけてるんじゃないもん・・・」

今日何度目かの頭のたんこぶをさすりながら雫が言った。

「だいたい、こんな暗いんじゃ木なんて見えないもん！」

ぶすつたれながらそう言うのと頭をぶつけた木に蹴りを繰り出した。

「植物に八つ当たりはいかんぞ？シィ」

「や、八つ当たりじゃないもん！罰を与えているんだもん！」

「しい、しいが語尾に“もん”を付ける時は自分に都合が悪くなつた時なんやと。知ってたか？」

「な！なにそれエ！！誰から聞いたんだよそんなこツツイター！！」

「・・・はあ」「」

麟とヴィラはもう気にしないことにしたようで、
大きなため息をつくと先に行ってしまった。

「うう．．置いてかなくなっちゃっていいのに．．．」

頭をさすりながらゆっくりと、重い足取りで歩き始める。

ここはどこかの森の中。

小さな村から朝一番で出発したボク等は
結局前日同様かなり速いスピードで移動した。なんでだ。

だけど、この森に入った時はもう既に日は沈み始めていた。
ヴィラはこの森を抜ければすぐだから真っ暗になる前は着くだろう
と言っていた。

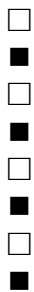
でもたぶんアレは普通の道でのスピードで行ったら、だったんだろう。
う。

あたりを見渡せば見えるのは今にも歩き出しそうな
人の顔みたいなのがある木々。
月の光と星の輝き。それだけ。

．．．だめだ。変なことばっか頭の中に浮かんでくる。
ボクらしくも無い。

ずっと先から麟がボクを呼ぶ声が聞こえた。

今行く、と短く返事をしてからゆっくり歩き出す。



「いッ！・・・てー」

前を歩いていた麟が急に立ち止まる。

「どうした？」

その前を歩いていたヴィラも立ち止まり、ふりかえる。

「え？あ、いや・・・枝でちょっと手を切っただけ・・・」

「・・・ふうーん」

普段怪我なんてしない麟が手を切るなんてめずらしいな。
なにか考え事でもしてたのかな？

「もうそろそろ着くじやろ。ケガなどはなるべくしないよう気を
つけるよ？」

ヴィラがボク等のほうを、というか殆どボクのほうを見ながら言っ
た。

「ほーい」

「・・・はあーいー」

ふんだっ！どーせボクは怪我してばっかですよーだ！

「ガサッ」

「「ッ！？」」

ボクがすねてみせたその瞬間、何か森の中で動く音がした。

「・・・リス？」

「ちゃう。少なくとも俺らぐらいのでかさはあると思う」

人・かな？

人じゃなかったら熊か、それとも・・

ゴッ！！

「イッツツッたあい！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「うお！？」

「うひゃッ!？」

そう遠くない、暗くてよく分からないけど

だいたい近い所で・・・誰かが頭でもうつたらしい。

どうやら人のようだ……。

そう分かったとたん肩から力が抜けた。

恐らく相手が自分と同じことをした、という事もあったのだろうが。

「こんなに暗くちゃぶつけるよね．．．」

「何一人で納得してんのや」

「へ？う、うん。なんでもない」

?

「いつたあゝ……」

「ッ！」

近づいてきてる。

人影が見え始める。

ガサツ・・

「あれ??」

おお？

月明かりに照らされて、見えたのは
ブラウンの髪の毛を肩より少し下まで伸ばした美人な人だった。

女の人だ・・

「君たち。なあにやってんの？こんな所で」

・・こっちのセリフですけど。

お姉さん美人でいらっしますね

こんな所一人で歩いて居たら危ないですよ？

「我等はアルフエームに行く所じゃが、そなたこそ何用でここに居るのじゃ？」

ヴィラが一步前に出て話す。

ヴィラが話すのを聞いて女の方は少し顔をしかめたけどすぐに笑顔になった。

「そう！じゃあたしと一緒にね！あたしもアルフエームに帰るところだったんだけど・・」

「帰る？じゃお姉さんアルフエームの人？」

意外と普通の人もいるんじゃない！

ダンディおじさんやヴィラと違って

渋谷とかに居そうなおシャレなお姉さん！

服は此処の物っぽいからオシャレってのは想像でしかないんだけどね。

「うーん、ちょっと違うんだけどね。あたし等ちょっと探し物しててさあー」

“あたし等”？ちゅーことは他にもどなたかおる？」

麟が回りを見渡しながら聞いた。

「そおー！もう一人とは森の中ではぐれちゃったの。で、戻る道わかんなくなつてー」

「迷子かよ」

「・・・」

麟の心の声が漏れたみたいだ。

さっきまでニコニコしていたお姉さんは急に動きを止めて笑顔のまま麟を睨みつける。

「・・・キミ、頭良さそうだけど世渡り下手そうだね」

怒ってる・・・って事は凶星かあ

怒りっぽい・・・のか、それとも機嫌が悪いだけなのか。

どちらにしろ、やっちな」麟」

「大丈夫、初対面の人に面と向かってそない事ゆうお姉さんほどで

はないっスから」

へ？

「はあ？何言つてんのキミ」

「分かんないんスカ？残念、頭はあかん様子。仲ようなれると思っ
たんスけどね」

「んなあ！？」

あーあ。麟らしくも無い。

なんで口喧嘩してんの。いつもの麟なら軽くあしらうか我慢するか
なのに。

「うう・・・いいわ、今の事は聞かなかったことにする」

おお？意外と大人？

「こんな所で口喧嘩もなんだしね。あたしはとりあえず街に戻って
ツレと合流しなくちゃならない」

そういつてヴィラのほうを見る。

「貴方達も宿とか取らなきゃならないんでしょ？みんないつぱいに
なっっちゃうわよ？」

「ああ、そうじゃな。もう日も暮れてしまったしの」

ヴィラはお姉さんに笑いかけると方向転換して先に進んだ。

「あ！まってようヴィラ！」

ボクもあとを追いかける。と、麟を忘れちゃあいけない。
振り返るとまだ麟はお姉さんで見つめ・睨みあつてゐる。

「麟！行くよー！」

「・・・おつ」

麟は短く返事をする。一回お姉さんを睨んでからヴィラのあとを追つて行つた。
つてボクは置いていくんかい。

「・・・彼、麟っていうの？」

「えっ？」

急に話し掛けられてビックリしながら振り返ると
お姉さんは麟の走り去つたほうを見ながら不思議そうに頭をひねつてゐるよう。

「・・・そうなんだあ」

何に納得したのか分からないけどお姉さんは一人でうんうん唸つてゐるから

ボクに用がある訳ではないらしい。

とりあえずボクはこのままだと本当に置いてかれるから急いでヴィラを追う事にした。

少し走ると麟の後ろ姿が見えた。

どうやら立ち止まっているらしい。その少し先にヴィラの後ろ姿も見える。

「おーい、なにやって・・・」

麟に近づいていくとヴィラの居る所よりも前のほうで、やけに明るい事に気がついた。

「・・・なに？」

ポーンとその光を見ている麟に聞く。

「街・・・だと思う」

街？ってことは、アルフエイムって国！？
やっと着いた！？

「ヴィラ！ここってもしかして・・・」

「ああ。ここが——」

パツと振り返ったヴィラの顔は、
今までに無いくらいの嬉しそうな笑顔だった。

「——我等の国、アルフエイムじゃ——！」

E p i s o d e ? ? ?

「知らない街での迷子は命取り」(前書き)

あけましてオメデトウございます。

今年もどうかよろしく願いいたしますっ

とりあえずココらへんで色々変わってくる予定なので

ギリギリまで直したかったのですがなにぶん未熟者なもので・

とりあえず出しましたがいつか変えるかもしれません

夜だというのに至る所にある灯りで、ほぼ昼間と変わらない。
いや、明るすぎて目がチカチカしてきた。

「すっごいねえ・・・ここ」

道行く人を避けながらヴィラに言った。

「そうじゃろ？この国はこちらの世界でもっとも大きいとされる国
じゃからの！」

ヴィラは故郷に帰ってきて凄く嬉しいのだろうか、

さつきから人にぶつかりまくってる。本人は気にならないようだが。

「せやけど、夜やのに人居すぎやないか？」

後ろからやつとの事でついてきた麟が言う。

「この国に夜など関係ない。昼間は大人どもが働き、夜は若者が騒
ぐ。休まぬ国じゃ！」

じゃ！って言われても・・・それって良い事ではないんじゃないの？

「危ないやろ？こないに人がいたら怪我人やて出るんじゃないか？」

「大丈夫じゃよ、皆慣れておるから」

な、慣れですか・・・

ここに着いてからのヴィラはいつもと違う気がする。
というか絶対おかしい。

・・やっぱり、自分の生まれ育った故郷に帰れたって事は嬉しいの
かな。

アレ？ヴィラって何で旅していたんだっけ。確かどこかに行こうと
してた筈なんだけど
戻ってきてよかったのかなー？

「ヴィラ何でそないうれしそうなん？帰ってきたの久しぶりとか？」

隣がヴィラの妙なテンションについて触れた。

ああ確かに。しょっちゅう帰ってたらこんな嬉しそうなのはおかし
いな。

「おー、よく分かったの！3年ぶりというところかな？帰ってきた
のは」

「3年間も何してたのさ・・・」

そんなに故郷が好きならしょっちゅう帰ればいいのに・・・。

「とりあえず修行が終わるまでは帰ってくるなと言われておったか
らの」

「修行・・・？」

なんだソレ。いきなり少年漫画か？

「ちゅうか帰っちゃいけなかったんじゃ？」

「今は緊急事態じゃ。仕方なかるう？」

し、仕方ないんですか・・・！？

「さ、とりあえず城へ行かねばの」

「「し、城？？」」

「？、そうじゃが。まずは守神様に報告しないとかんじやろう？
何を驚いておるのじゃ」

「そ、そうだね・・・なんでもないよ」

ビックリした。一瞬ヴィラが王子様でもやってるのかと思ったよ。
でもヴィラの一族って結構偉いらしいからありえない事じゃないか
もしれない。

守神サマってお城に住んでるんだ・・・神殿的な想像してたんだけ
どなあー！。

「さあ、こつちじゃ！ついて来い！」

そう言うヴィラは街の中心の方に向かって走り出した。

「うえ！？ちょ、ちよつとまってよ！！」

この人ごみの中ではぐれたらたまったもんじゃない！
急いでヴィラを追う。

「アイタツ！し、しい、ヴィラ！！ちょお待ち・・・」

隣も人にぶつかりながらも後からついて来る。

それを確認しながらヴィラを追うがヴィラはぐんぐん先へ行っ

まう。

ちくしょう。これがヴィラの言う“慣れ”というヤツか・・!!
ボクはさつきからガンガン人にぶつかっているのに対し
ヴィラはスイスイと人の間をすり抜けていく。

「ヴィラ・・までって・・!!」

人と人の間にヴィラの姿が埋まっていく。

ついに見えなくなったその時、前の方がいきなり騒がしくなった。

「・・?え、何何??」

訳が分からず人ごみに押し潰されそうになりながらもキョロキョロ
している

急に体の支えがなくなった。

「うわツ・・とっ」

なんとか倒れまいと足でしっかり身体を支えると

周りにいた人が人にぶつかりながらも我先にと道の端にはけて行く
のが分かった。

「何?」

訳が分からないままとりあえず道の端に向かって移動しようとした
時、

まだパラパラと人が居る道の先のほうからものすごい音を立てなが
ら何かが近づいてくるのが分かった。

「ッ!!」

道行く人を強引に押しのけながら近づいてくる本でしか見たことの無い馬が牽いているアレ

——つまり馬車の姿を確認すると同時にボクは道の端へ跳んだ。間一髪で馬車を避けると落ち着く暇もなく馬車の進行方向を見る。人が込みすぎていたせいかボクの後ろの方にいた人たちは馬車に気づくのが遅かったらしく殆ど逃げられていない。その中には麟もいた。

しかも状況が飲み込めないのか何なのかは分からないが麟は逃げようともせず馬車をぼうつと見ている。

——アイツ!! こういう時ばっかドンくさいツ!!

そんなとき、ボクの中に浮かんだ気持ち麟が怪我をしてしまつとかそんな優しいものではなく、やはり麟を罵倒するものだった事は言うまでも無い。

「麟!!」

こんなところで叫んだつてもう遅い。

麟の前にいた女性が馬車を避けようとして転んだその時、麟の着ているシャツの襟元に人ごみの中から手が伸びてきて、麟を勢いよく引つ張った。

・・・うえ??

見ると馬車は少し進んだ所で転倒している。

いくら頑丈でもあれだけの人にぶつかれば倒れるのは当然だ。

だけど問題はそこじゃない。

麟はと言うとその、誰かの手に引つ張られたおかげで馬車は避けられたらしいがその拍子に倒れて頭を打ったらしく起き上がりながら頭をさすっているのが人々の間から辛うじて見えた。

「ただ、その麟を見下ろすようにしてそばに誰かが立ってる。と、その時

「シィ！！大丈夫か！？」

「っ！ヴィラ！」

さっきの馬車を見てボク等を心配してくれたのか、ヴィラが戻ってきた。

「怪我は無いか？リンは？」

「ボクは大丈夫、麟もたぶん・・・」

大丈夫、と言いかけて麟は誰かが助けたのだという事を思い出す。振り向くと麟が誰かに手をかしてもらい立ち上がっているところが見えた。

「ああ、リン！」

ヴィラが麟に気づいたらしく、麟を呼びながら駆けていった。

「・・・あ、ちょっとまた置いていかないでよっ！」

心配してくれたのに置いていくんだ！？
ボクも麟は心配ではないけどその、

麟を助けた人物をもつと近くで見たくてヴィラを追う。

「リン！だいじょうぶか――

「しい」

ヴィラが駆け寄って声を掛けたが
麟がソレを遮ってボクを呼んだ。

「ッえ！？は、ハイ??」

ビックリして足が止まる。

ボクはいきなり呼ばれて訳が分からない。

「しい」

もう一度呼ばれて、麟の顔を見た。

そこで初めて気づいた。

麟はボクを見てない。

ボクに話しかけてもいない。

何かを聞きたいわけではなくて、ただ、ボクの名前を呼んでいるだけ。

それはボクの名前じゃないといけないわけでもなくて、
誰かの名前を呼んで問いかけたいだけ。

でも本当はそんな必要はなくて、答えは自分で分かってるんだ。

ボクは麟を視線の先を見た。
そして、思った。

「しい」

もう一度、麟が呼ぶ。

無意識に口が開いて自分でも知らないうちに声が出た。
その声に自分でも驚いた。

「・・・京ちゃんきょうちゃん」

彼を呼ぶ自分の声は、一年前と同じ声だった。

5歳の時、ボクは大阪から千葉へ引越してきた。

まだ小学校に上がる前だったし、別に寂しいとか悲しいとかは思わなかった。

なぜか麟も一緒に引越してきたしね。

今となつちゃ本当に不思議なんだけどその時は深く考えたりはしなかった。

さて、引越してきて荷物の整理が終わったらご近所さんに挨拶しなきゃ！

という父の声のもと、とりあえずボクと父と麟はご近所さんにご挨拶しとく事に決まった。

麟がなぜいるかと言うと自分のほうも終わって無いくせに人の荷物整理を手伝いに来たついで、らしい。

お隣さんちはごく普通の4人家族で親が2人に子供が2人。

ボクより2歳上の兄に兄と5歳違いの妹。

ボク等が適当なものを見繕ってご挨拶に伺うと

きれいな若奥さんがでてきて子供たちを呼んでボク等に挨拶させた。

「露草^{つゆくさ} 京^{けい}です。よろしくお願いします」

やけにしつかりしたお兄さんとまだちゃんと挨拶も出来ない妹ちゃん。

仲がよさそーだなあ・・・

はじめ一軒目にして挨拶めぐりが飽き飽きしていたボクはそんなことしか思わなかった。その時、ボクの後ろから声がした。

「京^{けい}で、言いにくいわアー。京^{きょう}でええやろ」

麟^{りん}だった。

この頃の麟はやさぐれてて、いけ好かないガキだった。

もちろんボクは慣れてたけど。

少なくとも始めて会った人にそんなこと言うなど今ではありえないことだからね。

でも、まあ、この頃は子供だったと言うかなんと言うか。とにかく生意気で。

「麟^{りん}も言いにくいよね。麒麟^{きりん}でいい？」

ボクが麟を視線で責めてると

こんどは京^{けい}つてやつが言った。

ちなみにボク等の自己紹介は既に済ませているから彼は当然麟の名前も知っていた。

「麒麟^{きりん}て！！そもそも麒麟^{きりん}言えるなら麟^{りん}かて言えるやろ！？」

その言葉に麟が反応する。

「麒麟^{きりん}は始めに“キ”が付いてるから言い易いんだよ。麟^{りん}だけじゃダメなんだよなあ」

京^{けい}というヤツは・・・

7歳とは思えぬ高みから麟を見下し、バカにしている。

コイツ・・・大人か・・・！！

なんて、ボクがくだらない事を考え始めている時には麟はすでに怒

って帰るところで、

そんな時、彼がボクに声を掛けて。

「雫ちゃん、雫ちゃんは京きやうって呼んでいいからね」

「え、ど、どーもありがとーございます・・・」

どう答えていいかわからなかったボクはとりあえずお礼を言った。
するとそれを見た麟がさっさと帰ればいいのにわざわざ文句を言いに戻ってくる。

「女の子は特別だからね」

京は微笑んでそう言った。

それが麟をさらにイラつかせた。

「ふざけんなデメエ、エセ紳士!! ぜってえろくな大人になんねエぞ!!」

「いやあ会社勤めするようになったら少しは抑えるつもりだよ?」

「自覚してんのかよ!!」

いきなり口喧嘩を始める二人（ただし一方的に）。

それを見守るうちのオヤジと若奥さん。

それをみていた幼いボクは少し考えてからこう言った。

「じゃあボクは“京きやうちゃん”て呼ぶね」

その時なんでそんなことを言ったのか、今はもう思い出せない。

でもたぶんその時もよく分かんなかったと思う。

「な、なんで“ちゃん”・・・??」

京が困惑しながら聞いてきた。

ボクはその問いに戸惑いながらも小さな頭から必死に言葉をひねり出しながら答えた。

「だって・・・ボク、女の子が特別とか分かんないから・・・」

「「?」」

麟も訳が分からないと京と一緒にボクを見る。

「・・・だから女の子が特別なら、男の子も特別で、」

「ブッ!!」

生まれたときから一緒だった麟はこのときボクがなんて言おうとしたのか分かったようであざけりしておなかを押さえて笑いを堪えながらどこかへ行ってしまう。

それでもボクは続けた。

「ボクが雫ちゃんなら・・・京も京ちゃんだもん」

「「ブブーッッ!!!」」

生暖かい目で見守るのをやめてボクの話に耳を傾けていた親ズが吹き出す。

「・・・」

京はなんともいえない顔でボクを見てる。

遠くのほうで麟の爆笑する声が聞こえた。

たぶん、いまほど恥ずかしいときはもう後にも先にも無いだろう
このときは、そう思った。

これがボクと京ちゃんのファーストコンタクトだ。

この時からボクと麟よく京ちゃんはよく3人で、

京ちゃんの妹の舞ちゃんもたまに交えて4人遊ぶようになった。

一年前までは。

一年前、京ちゃんは事故に遭って意識不明。そして植物状態。
舞ちゃんと道で会っても話さなくなった。

それが、それが、なんで、

「京ちゃん・・・」
きょうちゃん

彼は変わってなかった。

一年前と同じ顔で、

「雫・・・か」

同じ声で。

「久しぶりだな、雫」

ボクを呼ぶ。

「久しぶりって・・・そうじゃなくて・・・でも・・・」

自分でも何が言いたいのかわからない。

クエスチョンマークが頭の中を埋め尽くす。

「・・・て、」

隣から声が聞こえた。

「何でここにおんねん！やろが。ふつー」

隣・・・そう、ソレが言いたかったんだよボクは。

「・・・言う事がなくなった」

ボソツと思わず口から出た言葉。

隣に一番言いたかった事を言われてしまっって言う事がなくなってしまった。

「ブツ!!」

京ちゃんがボクの呟きを聞いて吹き出す。

おなかを押さえながら人目をはばからずに爆笑。

全部、京ちゃんだ

「アハハハハハ！！かわんねえなあ2人とも！この状況でソレって・・・!!!」

感動の再開・・・ではなさそう。
この笑い声で全部台無しだ。

「・・・変わらないのはそっちだよ・・・なんでこんな所に」

何でこんな所で笑い転げているのか。

とりあえず言ってみたが今はそれがあまり重要に思えてないことに気づいた。

「とりあえず殴っていい？」

「や、遠慮しとく」

笑いをピタッと止めて真顔で拒否する京ちゃん。

なんだよ。そんな顔も出来るんじゃない。

「シイ、知り合いかの・・・？」

ウィラがボクと京ちゃんを交互に見ながらオドオドと話しかけてきた。

「うん……うん……、ッ！」

その時、ヴィラのはるか後ろのほうからこちらに近づいてくる人影が見えた。

・・・スッゲーどうかで見た事がある。しかも最近。

「だあ——！！！！！！！！！！！！！！京お助け——！！！！！！！」

その人影はこちらを睨み、何かを叫びながら走ってくる。

つて京助つて誰・・・？

「げ、萌もえ・・・」

京助さんの正体を突き止める前に京ちゃんの嫌そうな声が入る。
萌つて・・・もしかして・・・？

「京助きょうすけ！！あたしすっっごい探したんだけど！？」

声の主に目を向けると、案の定そこにはメチャクチャ頑張つて走つて来た人影、
つまり、森であつた美人おねーさんの姿が。

「あゝ・・・すみませんでした」

京ちゃんがおねーさんに返事をした。
え、“京助”つて・・・京ちゃん？？

「本当に悪いと思っているなら目線を合わせなさいよ！！女の子を森の中に置いて行くつてどういう神経してんの！？」

「こつという神経です」

「どついう！？」

まるでコントのようだ。

「まるでシィとリンのようだ・・・」

「は？」

「え？」

え、呼んだ？

つてカンジの声を出した麟。

なんも聞いてなかったらしい。つか聞いてなかったんなら返事すんなよ・・・！

「むう・・・めずらしいのう。いつもならハモるのに・・・」

「な、何ガツカリしてんのさ！？つかハモるって言葉知ってんだ！？」

「う！我をなめるなよ！？知っておるぞこれくらい！！」

「う・・・ご、ごめん」

「別名ユニゾンじゃ」

「ちよつと違うー！！」

「「・・・」」

今、ボクもはつきり思った。麟がおかしい。

ちなみに京ちゃんは萌と呼ばれるおねーさんとまだ口喧嘩してる。

「おかしい・・・今のところいつもなら絶対ハモっておるのに」

「う・・・心底同意したくないけど、確かにいつもハモってた気がする・・・」

麟が少し変だ。

でも、すぐ元に戻ると思った。

ただこの時、ボクは気づけなかったんだ。
麟のなかに隠れた、大きな事実。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994j/>

ボク等のユメ物語

2011年10月6日03時34分発行